
バトルネットワークアイリスエグゼ

Rago

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バトルネットワークアイリスエグゼ

【Nコード】

N2397X

【作者名】

R a g g o

【あらすじ】

短編じゃ収まりきれないので、長編にしました。

あらすじ

20XX年。Dr.ワイリーによって引き起こされた事件から、4年が経過し、当時小学生だった光熱斗は高校生となり、新しい生活を送っていた。

そんな中、数年前、1人の天災によって引き起こされた事件があった。その少年と熱斗は友達となり、ともに同じ高校を目指し、合格

した。

ある日、謎のプログラムを拾う。それは、優しさで出来たプログラムであった。

そこから、少年、才葉女守さいはめもりは事件に巻き込まれるようになる。

自らが犯した過ちを、償えと言つのように……。

「俺はもう、失うのが怖いんだ。これ以上、何もかもを失うのが・

・

「大丈夫。私が側にいる。だから、もう怖がらないで」

ブローグ「数年前の出来事」(前書き)

あらすじとなります。

プログラグ「数年前の出来事」

数年前、俺は……

自らの天才を、初めて呪った。

最初は、親切で直したプログラムが……まさか、ネットワークに破壊をもたらすプログラムだったとは。

当時の俺でも、それは予想できなかった。

忌々しいそのプログラムは、暴走を始め、一部のネットワークを破壊していく自動破壊吸収型プログラムへと変貌を遂げた。

無論、俺は止められない。

俺はプログラムを直せても、プログラムを破壊する、バトルが崩壊的にダメなのだ。

ただ指をくわえて黙って見るだけの状況。俺は耐えられなかった。自分のせいで、インターネットが崩壊するのを。

だけど、俺一人では立ち向かえなかった。弱すぎる。力が、力があれば……

そんな時、俺にとってのヒーローが現れた。

そのヒーローは、2体のネットナビだった。

1体は、情熱のように赤いナビで、主にソードを主流として戦うナビである。

対するもう1体は、正義感の強そうな青いナビである。バスター系を使い、相手を倒していった。

俺はその様子に見とれた。どんな困難になろうとも、戦い続けるその2体に。

そしてついに、俺が直した自動破壊吸収型プログラムは、デリートされたのであった。

呆然とする俺のナビに向かって、その2人組は言った。

「あとでオフィシャルに来るように。無駄な抵抗はやめておけ」
「事情を話してくれないかな？ キミがやったことは、決して軽くはないから」

無理がある。

俺だって、知ってやっていたわけではない。

ただ、直してほしいといわれて直したただけだ。

まさか、あんなことになるとは……。

俺だって思わなかったのだから。

そう、2人組に話した。

すると、その中の赤いナビが溜息をつく。

「……要するに利用されたってわけか。その目を見る限り、ウソは感じられない。行くぞ、ロックマン。まだこの周囲に、その敵が潜伏している可能性がある」

そう言つて、赤いナビはその場を立ち去った。

残った青いナビは、俺のナビをジッと見つめていた。

「……何だよ？ 最悪ウィルスの根源として、デリートする気か？」

「誰もそんな恐ろしいことは考えないよ。ただ、熱斗くんが興味津々に見ているから」

「熱斗？」

それが、青いナビのオペレーターであることだと知るのに、時間はかからなかった。

しかし、興味津々とは一体？

『お前がこの事件を起こしたヤツなのか？』

急に、画面が通信モードとなり、オペレーターの顔が映った。

「うわっ！」

ついビククリして、腰を抜かす。

『あつはは。そうビククリするなよ』

「熱斗くん？ 急に画面を切り替えられたら、誰でもビククリすると思うけど……」

青いナビが、呆れながらツツこむ。

それを半笑いでごまかしながら、熱斗というヤツは俺に向かって、
言ってきた。

『なあ、見るからに死んだような目をしているなお前』

「ほっとけ」

コイツにはデリカシーという言葉がないのか？ と思つものの、
すぐに熱斗は謝る。

『ゴメンゴメン。あまりにやる気のなさそうな目で、生きているの
か死んでいるのか分からなかったからつい……』

「お前は喧嘩売っているのか？」

その瞳に、精力が戻ってくる。

『うわっ！ わ……悪気はなかったんだ！』

「熱斗くん……。悪気しか感じられないのはボクだけじゃない
と思つんだ」

完全に呆れたナビである。

俺もそのやり取りに、少し笑いが出てくる。

バカすぎる。これが本当にさっきの戦いをオペレートしていたヤツ
なのかと。

すると、熱斗が、画面越したが、手を差し出す。

『でもさ、あのプログラムを直す腕は凄いとおもつんだ。だからさ、
利用されていたってわかれば、すぐに解放してくれるだろうさ。だ
からさ……』

その表情を、まんべんの笑顔で満たして俺に、救いの言葉をかけて
きた。

『俺と、友達になろうぜ』

俺は、啞然とした。

無理もない。唐突に友達になろうといわれて、どう思つものやら。

……バカだ。そう思うしかなかった。

だが、俺はその笑顔に引かれた。

偽りのなく、正義感があるその強い眼差しに。

俺に、友達などいなかった。

天才が故に、誰も相手してくれなかったのだ。

いつも一人で行動し、いつも一人で物事を解決してきた。

そんな俺に対し、友達になろうなどと・・・。

俺は疑うことしか知らなかったが、その時は違った。

信じる心しかなかったのだ。そして俺は、その瞳から、大粒の涙が零れるのであった。

初めてできた友達。初めてできた希望。

そして、初めてできた絆。俺は嬉しかった。

ずっと孤独でしかないと思われた道のりに、初めて分岐点ができたように。俺は初めてできたその分岐点を、孤独とは違う方向を歩みだしたのであった。

そして時は、3年後に進む。

プロローグ「数年前の出来事」（後書き）

まあ、考えてみれば数十ページ辺りまで来た段階で、無理があると
いうことを考えなかつた俺がバカでした。

そんなわけで、次回に続きます。

これも、不定期更新です。

いろいろと始めて不安だらけです。

キャラ紹介

光熱斗

15歳（男）

デンサンシティ秋原町出身の高校生。勉強はダメだが、持ち前のウ
イルスバステイングで幾度もなく世界を救ってきた。

3年前にニッポン公認オフィシャルネットバトラーとなり、元チー
ムであった炎山と共に世界とニッポンの電腦世界を守っている。

そんな中、とある事件で主人公、才葉女守さいはめもりと出会い、友達となつて
いく。

新たなる脅威を感じ、今日もネット社会を守っている。

才葉女守の設定は、次回紹介します。

第1章上

私立デンサン高等学校。

コンピュータ関連の授業を行う電子機器専門の開発科。そしてウィルスバスターングを徹底的に指導するオフィシャル科が存在する。

俺はその中で、開発科に所属している。

俺の友人もそこにいるからだ。

ある程度の不安はあるが、その友人の助手となるために俺は日々努力している。

そんな中の、ある1日である。

キーン、コーン、カーン、コーン。

俺の耳に、学校のチャイムが心地よく聞こえた。

やっと学校が終わったのか。そう、俺は感じた。

うつ伏せていた顔を上げ、目の前の状況を確認する。まず、電子ボードに書かれていることだ。連絡事や最近の情報などが一気に黒板に映し出される。

……ふむふむ、明日は科学省への見学か。悪くない選択だ。

それなら、アイツも喜ぶだろうな。

アイツは、自分の父親が好きだもんな。甘やかされて育てられたのか？ それとも、科学者だったから相手にする時間が無かったから寂しかったのか？

何にせよ、俺はアイツの嬉しそうな表情を見なきゃならんだ。まあ、父親に会いたいとは言っていたからな。反抗期などコイツには無かったのか？ そう、俺は疑いたくなる。

苦笑する俺だったが、

「あれ？ どうしたの、女守君？」

声が聞こえたのでそっちに気を向ける事にした。

そこには、ロングヘアにピンク色の髪、そしておしとやかな顔にバランスの取れた体つきの少女。

名を、桜井メールと言う。

「その名で俺を呼ぶな。女守なんて、何で男の俺が女の文字を入れられなければならないのだ？」

すると、メールが少し引きつった顔になる。

「確かにね。女守なんて、男に名づける名前じゃないものね」

女守。それが俺の名だ。

さいはめもじ
才葉女守、女を守ると書いて、メモリだ。

それよりも、才葉と呼ばれた方がよっぽど気が楽だ。

「ねえ女守君？」

「才葉と呼べ」

ギロリと瞳を右にやると、流石のメールも少しひきつった。

「じゃ、才葉君。熱斗知らない？」

「熱斗？ 俺の知る範囲だったら、今日は電腦オンラインゲームの更新日だと言って、家に直行していると思うぜ。アイツの場合、無駄にそんなことに対しては早いからな」

「全くもう。私を置いてどこかに行くなんて、信じられない」

プンスカという表現が似合うほど、メールは頬を膨らまし怒っていた。

そんな様子を見て、俺は苦笑する。

「……仲が良いんだな」

「も……もう！ そんな、私と熱斗とは、そんな関係じゃ……」

顔を赤くするメール。そしてその辺にいる男子は……。

「熱斗、クロス」

「憎き最強め！ 隙あれば絶対にデリートしてやる」

「お姉さまを独り占めしようだなんて、許せない！」

嫉妬で全身を燃やしているようにも思えた。

中に女子まで混じっていたが、気にしない。

ここまでメールが想いを寄せている相手。名を光熱斗ひかりねるとと言う。

彼を知らない者はこの学校、いや、この世界にはいないであろう。

WWを1人で倒し、犯罪組織であるゴスペルやネビュラを壊滅にまで追い込んだ、言わば正義のヒーローであるのだから。

当時の俺でも、憧れの存在だった。

小学生ながらも、犯罪組織を倒すと言うのは、すごい事だと思って
いたのだから。

しかし、彼は俺までも救ってくれた。

数年前に起こった、俺が原因で日本のデンサンシティ周辺の電腦世界が半壊したあの事件。

思い出すたびに嫌気が差す。

のちにこの事件のことを「ネットワーク崩壊事件」とも呼ばれるようになった。

その名残として、各地のネットワークでも崩壊寸前まで追い込まれたという話だ。

そこまで大掛かりな事件である。報道機関は、その真相を突き止めようとしたまでだ。

だが、俺は一部の者にしか知られないまま、その事件は年が過ぎるたびに人々から忘れられていくのであった。

熱斗はそんな天才で「天災」な俺を、友達としてくれたのだ。

アイツには、返しきれない感謝が詰まっている。

そんなアイツのことは、十分知っている。

俺は肩をすくめ、帰る準備を始めた。

恐らくあいつは今、電腦世界にいると思うからな。

「さきまわりして、状況を伝えるか」

面倒くさいと自分に言い聞かせながら、俺は重たい足を動かし、ノ
口ノ口と帰っていくのであった。

0000000000

秋原町行きの地下鉄に乗り、俺は中でナビの調整をしていた。最も普及しているノーマルナビの情報をPETと呼ばれる携帯端末に表示させる。

バグなどの情報も無く、いたって健康状態だ。

流石だ。そう思った時、目的地である秋原町に近づいているとアナウンスが流れた。

俺はPETを専用ホルダーに収納し、地下鉄から降りる。

そして地上に上がると、自分の家まで寄り道もせずになつさと歩いた。

家にたどり着き、玄関に丁度いた母親に向かって「ただいま」と声をかける。

「おかえり。今日はどうだった？」

「いつも通りだ。明日、科学省まで見学に行くらしいから、帰りは少し遅くなる」

「わかったわ。じゃあ、お母さんは今から仕事だから」

「了解」

手短かに会話を済ませ、俺は自分の部屋に向かった。

最近、入学祝いに買ってもらった最新式パソコンを立ち上げると、PETのナビマーク部分をカチツと自分のパソコンに向かって押した。

「ログイン」

中にいたナビが、電腦空間へとログインした。

0 1 0 1 0 0 1 0

0 1 0 0 1 0 0 1

0 1 0 1 1 1 0 0

秋原町の電腦世界

周りを見渡し、目的のナビを探すべく徘徊していた。

すると、案の定そのナビがいた。

俺はノーマルナビ、通称「ポンド」に命令を送り、そのナビのもとへと向かわせた。

「どうも、ポンドです」

丁寧にポンドが挨拶をする。

それに気がついたのか、そのナビが振り向く。

胸の真ん中にトレードマークであるナビマークが記され、全体的に青くしつかり者の目をしたナビ。

名を、ロツクマンと言う。

「あ、ポンド。こんにちは」

ロツクマンも同じように挨拶を交わした。

『遅かったじゃねーか女守』

『その名で俺を呼ぶなと何度言えば分かる？ お前の耳は節穴か？』

「ちなみに、節穴は目に対する言い方だけだね……………」

なぜかロツクマンが呆れたように額に手を当てる。

『分かっているって。ただ表現が曖昧だっただけだよ』

強がって一押ししておく。

さてと。と、俺が口になると、さっきのメイルの態度を一応熱斗に報告しておく。

熱斗は首をかしげる。

『アイツと何か約束していたっけな？』

『だよな？ 別に約束した覚えがないのなら、置いていってもかまわない気が……………』

お互いに似たような答えにたどり着く。

それを聞いていたのか、俺と熱斗のナビは……………。

「……………絶対にわざとですね」

「いや、もう慣れてるからアレだけど。熱斗くんも女守……………じゃなくて才葉くんも鈍感のレベルがすでにボクたちの知っているレベルを超越しているからね」

更に呆れられたような目を、俺たちに向けていた。

おかしいな。何かドツボに填まるようなことを言ったか？

考えても無駄なような気がしたので、とりあえずと話を戻す。

『さて熱斗。電腦オンラインゲームの更新されたゲームを早くやりたい気持ちはあるだろうが、』

『分かっているよ。それ程までに、ゲームに熱中しすぎて仕事をほっぽらかす俺じゃないっつーの』

フン！ と鼻息を上げる。

途中でロックマンが「メールちゃんのお買い物に付き合っつて言われた時には、ゲームして遅刻したクセに」とジト目で見られていた。それを熱斗が一瞥して黙らせる。

「それで？ 今日ほどの辺りをパトロールするのですか？」

俺のナビが聞く。

ちなみに俺たちがやっているのは、単純にパトロールである。

ここ周辺で、犯罪があっていないか。暴走ナビがないかどうかを隅々までパトロールする役割を与えられていた。

ちなみにこれは、俺が与えられた罰であり、別に熱斗までやる必要はなかったのだが……。

お人よしなアイツは、そんなことを気にせずに「一緒にやろうぜ」と言い出した。

全く、人が良すぎるヤローだぜ。そう、俺は当初は思ったりはした。しかし、実際に一緒になって行動してみれば、彼の凄さが実感できた。

一瞬にしてウイルスどもをぶちまけるロックバスターに、熱斗の天才レベルのオペレーション技術。

ロックマン自身の能力の高さなど、俺から見てもその姿は、まさに「神」そのものである。

俺なんか、ウイルスバスターなんてできはしないし、いつも尻尾を巻いて逃げるだけである。

そんな俺にとつて、熱斗は憧れの存在でもある。

対して熱斗の場合、その驚異的なプログラム設計に自己修復技術。

どれも天才レベルのプログラマーとして生きていけるほどの腕を持

つ、周りから「天災」と呼ばれているほどの存在だ。熱斗から見れば、俺こそが憧れの存在だと言う。

つまり、お互いがお互いに目標としているため、うまくいけているのであるのが俺たちがすぐに仲良くなれた要因である。需要と供給のようなシステムだな。

はてさて、そんなことがあって、俺たちは日々こうやってネットワークを監視しているわけだが、日に日にとんでもないことばかりが起こっているのである。

昨日なんて、ロックマンがナビ同士の喧嘩に本気でブチ切れ、とんでもない顔を見たばかりだからな。

大人しい人が本気で切れれば、とんでもないことが起こるとは言うが、まさかあそこまで怒るとは。

起こるだけに、怒る。うん、いい言葉だ。

などと考えると、ロックマンが

「何か変なことを考えなかった？ 一瞬寒気が走っただけけど？」と、こちらの思考を見抜いたかのようなことを聞いてくる。

『いや、別に』

と、俺はとぼけた。

「ふーん。ならいいけど」

再びロックマンは前を向き、辺りを見渡す。

ここは秋原エリアと隣町の間にあるエリアで、ちょうど境目にさしかかっていた。

「ふう、今日はここまでだね」

異常がないのを確認するなり、ロックマンは引き返そうとする。と、俺の視界に何か映る。

『ちよつと待て。ポンド、あのデータを拾ってきてくれ』
気になって、そのデータを拾わせる。

何かのデータのようにだ。しかも、そのカケラ。

そういえば、と思い出し、俺はとあるものを表示させる。

ここ数年、インターネット中で何かの破片が飛び交っている。それ

を全て集めた者は、幸せがおとずれると言った伝説までもが存在する。

しかしだ、半数以上の破片は俺が所持している。

ある者からは多額の金額で買取り、ある者からは交渉で譲ってもらったりした。

中には俺の破片全てを奪おうとしたヤツもいたが、ロックマンが迎撃して襲わないと約束させた。

表示された破片は全部で49個。残り1つで全てが揃う。

『まだその破片を集めていたのか？ 何のプログラムかも知らないで。またあの事件のように下手なプログラムかも知らねーぜ』

「熱斗くん。人の趣味に口出しするのはあまりよくないことだよ！」
ロックマンが熱斗に注意をする。

『ゴ・・・ゴメン』

「謝るなら才葉くんに謝りな」

『・・・いや、大丈夫だ、問題ない。ただ、このプログラムは大丈夫だと確信しているから』

「『確信？』」

2人そろえて声を発する。

『ああ。このプログラムから、声が聞こえてくるんだ。何だか優しいなプログラムであり「ネ・・・ットく」やら「カ・・・ネルにい・・・さ」とか、そんな単語ばかり出てくるんだ。気のせいなら、それでいいんだがな』

そう言つて、俺はそのプログラムを直そうとした。

だが、熱斗とロックマンは何か心に引つかかったらしく、慌てて止める。

「待って！ そのプログラム、ボクたちは知っているかもしれない」

『ああ！ 何だ、この妙に頭の中で何かが引つかかっている感じは！』

何を言っているのかが話しについてこられない。

ついでに、この反応で俺が痛い目で見られるかと不安であったがそ

うでなかった安心感もある。

「才葉くん！ そのプログラム、明日科学省で見てもらおう！ その中には、ボクと熱斗くんの大事な人が眠っている可能性があるんだ！」

大事な人。その言葉に、俺は反応する。

「……わかった。だが、どうせなら全てのパーツをそろえてからの方が都合がいいだろう。この場合だと、中途半端なだけになるからな」

俺はポンドにプログラムを探すように命令を送ろうとした。

だが、その時に事件が起こる。

ガァン！ と音が響く。

「何だ？」

「ん？ あのセキュリティゲートが……壊されてる！」

見ればセキュリティゲートがあつた部分に、かすかにその破片が見受けられた。

「誰かが侵入したみたいだよ。行こう、熱斗くん！」

「ああ、それにあの場所は……行こうぜ女守！」

「だから才葉と呼べ！ このバカ！」
多少の口げんかをするも、急いでセキュリティゲートの奥へと侵入した。

```
1 0 1 1 0 1 0 0 1
0 1 0 1 0 0 0 1 0
0 1 0 0 1 1 0 1 0
```

しばらくすると、誰かがそこにいた。

「止まれ！ オフィシャルネットバトラーの者だ！ 不法侵入罪として取調べを受けてもらう！」

ロックマンが手をロックバスターに切り替えて相手に威嚇する。

すると、そのナビは「ああ？」と不機嫌な声をあげる。

「チツ、早速見つかったか。だが、この俺の敵ではないな」
その巨体をズシリと音を立て、こつちを振り向く。

体のあちらこちらにミサイルポットをはめており、目は夕焼けのよう
に赤い目玉が1つだけである。

その1つ目で、俺たちを睨む。

「動くな！ 動けばオフィシャル権限でお前をデリートする！」

「ああ？ 俺をデリートなあ？ なかなか面白いことを言うな小
僧。俺を誰だか知っているのか？ 俺はな、ネットワーク宗教団体

『スパイラル』の上層部の1人、ミサイルマン様だぞ？」

ネットワーク宗教団体「スパイラル」その名前を、俺たちは知って
いる。

『スパイラルって、確かテロリストじゃねーか！』

『チツ、思わぬ事態に遭遇したな』

スパイラル。ネットワーク社会においても、何かしらの神を崇める
宗教団体は珍しくない。ただ、中には神のためだとか、ネット社会
に好ましくないという理由で無差別テロを引き起こす団体も存在す
る。

目の前にいるのは、そんな宗教団体の中でも特に危険な団体である。
過去をたどれば、2年前に起きた「列車爆破事件」でその名を知ら
され、その時には200人という死傷者を引き起こした。

最悪な事件で言えば、1年前に飛行機をハイジャックし、ネットワ
ーク発展地域であったイントウに8機もの飛行機を投下。800万
人以上の死者と重傷者を出した史上最悪のテロ事件「エアーズメテ
オ事件」が引き起こされた。

それらが理由に、特に危険視されているテロリストとして知られて
いるのである。

そんなヤツがこんなニッポンの、しかも秋原エリアに来ているんだ？

「あわわわわ。どうしましょう、才葉さま？」

ちなみにそんな状況でも、俺のナビはあたふたと慌てていた。

『慌てるなポンド。だが……』

流石の俺でも、少しは怖いという感情が込み上げている。

今日は死神にでも憑かれてるんじゃないのか？

「雑魚が1匹と、最強が1体か」

ミサイルマンが、ポンドとロックマンを見渡す。

「こ……このっ！　ロックマンを雑魚呼ばわりするな！」

「お前のことだ、ノーマル雑魚」

ノーマル雑魚つて、俺のナビのことか？

『まあ、否定はしないが』

「才葉さま！？」

なぜか涙目で俺の方を振り向く。

『しかし、それはどうでもいいとしてだ。何が目的でここに進入した？　こんなネットワークに侵入しても、お前らにとって何も得が無いはずだ』

それを聞き、クツクツクと笑い声をもらす。

「確かにそれはそうだろうな。だが、俺たちの組織が最も欲しているものがそこに存在するとすれば、どうする？　え？」

ニタァーと、目を細くしてにやける。

「決まっている。テロリストの欲しているものなんて、マシなものであるわけが無い！　熱斗くん！」

『ああ！　ロックマン！』

ロックマンのヘルメットから、マスクが出てくる。

バトルモードへと変換したのである。

ちなみに俺のナビは、足手まといにだけはなりたくないのです。そのまま引き下がる。

「頑張ってください！　ロックマンさん！」

『お前も頑張れや。どうやら、俺たち囲まれているぞ』

気が付けば、周りに大量のウィルスがポンドを囲むようにして群がっている。

「い……いつの間！」

『恐らくは、話している最中にこっそりと仕込んでいたんだろうな。』

全く、卑怯な連中だ』

チツと、舌打ちをする。

だが、熱斗はと言えば……。

『面白い！ 久々に暴れられるぜ！』

『呑気なヤツだ。だが、それほどまでに精神を磨いていなきゃ、こんな状況を楽しむバカはお前ぐらいしかないからな』

呆れ苦笑気味に説明を入れておく。

さて、ここからが問題だ。

俺のナビであるポンドは、一応戦うことはできる。だが、主に俺のプログラムを補佐するプログラムしか与えていない。

つまり、戦い用のナビではなく、純粹に助っ人用のナビなのである。

『だが、戦えるなポンド』

「いえ、戦えません」

ミシツと、偶然近くにあったタッチペンを握りつぶす。

真ん中が折れ、手を放せば破片がパラパラと落ちている。

『もう一度だけ聞こう。戦えるな、ポンド？』

「は……はい！ 何とかやってみます！」

さて、と熱斗と俺は手にバトルチップを取る。

『やることがえげつないな。女守』

『やるなら力ずくだ。お前の口癖じゃなかったか？』

『アレはデカオだ！』

『フン、いいだろ』

俺の表情に、笑みが浮かんだ。

『さあ、俺とポンドの初披露宴だ！ ウィルスバスティングは苦手だが、熱斗を今まで見てきたんだ！ やろうじゃねーか！ どちらかがデリートされるまで終わらない、争いを！』

その時、熱斗も同じような笑みを、浮かべるのであった。

第1話上終わり、第1話中にく

第1章上(後書き)

指摘、感想などがありましたら、感想にお書きください。

第1章中

2体のナビは、ウィルスの攻撃ですぐさま行動を開始した。まずはロックマン。

メットールのショックウェーブを容易くよけると、背後にまわり、腕をロックバスターに切り替える。

そして、バスターをチャージし、前を振り向いたメットールに向けチャージバスターを放った。

避ける術もないメットールは直撃を食らい、爆発を起こしその場から消え去った。

つまりは、デリートである。

更に背後から、2体のメットールが攻めてくる。

それに気づいたロックマンは「熱斗くん！」とオペレーターの画面を見る。

『まかせとけ！ バトルチップ、エリアスチール！ スロット、イン！』

PETの画面に、バトルチップ情報が表示される。

瞬間、メットール2体は同時にショックウェーブを放った。

しかし、その攻撃は当たらず、一瞬にしてロックマンは姿を消していた。

戸惑ったメットールだったが、ロックマンの姿が、メットールの背後に現れる。

熱斗は、続けてチップを手に持っていた。

『バトルチップ、ワイドソード！ スロット、イン！』

ロックマンの腕が横に長い剣となり、2体のメットールを瞬時に切り裂く。

他にも、キャノーダムやチュートン、キオルシンなどが一斉にロックマン目掛けて攻撃を開始した。

しかしながら、熱斗は慌てず、ロックマンも慌てることもなく対処

する。

「熱斗くん！ インビジブルをお願い！」

『任せろ！ バトルチップ、インビジブル1。スロット、イン！』
瞬時にロツクマンの体が透明化し、攻撃が全てウイルスたちに当たる。

放たれたキャノンは突撃したキオルシンに。チュートンが発射した
ネズミ型ミサイルはすり抜け、キャノードムに命中する。

更にデリート寸前のキオルシンがチュートンに命中し、互いにデリ
ートされた。

結果、その場で攻撃を行ったウイルスは、お互いの攻撃によって自
滅した。

すげえ。ただそれだけしか頭の中に入らない。

流石は最強のネットバトラーと言われているだけある。アレぐらい
の技は朝飯前ってか？

そう余所見をしていると・・・。

「才葉さま！ 助けてくださあーい！」

俺のナビが、ウイルスに追われている。

あの勇姿を見た後だけに、情けなくなる。

『つたく、もう少し戦闘用プログラムも組み込むべきだったか？
今更後悔しても遅いけどな』

そう言つて、バトルチップを手に持つ。

『バトルチップ、ジャンプスナイプ！ スロット、イン！』

チップの情報が画面に表示される。

ウイルスから追われていたポンドが、突然大ジャンプを決める。

ぎゃああああ！！ と声をあげているが気にせず俺はPETに表
示されているレティクルに照準を合わせる。ちょうど重なった時、

「撃て！」と命令する。

空中で、一線の光が放たれる。

ポンドを狙っていたウイルスどもは、空中からの狙撃で1体、2体、
3体と数を減らしていた。

やれば出来るじゃねーか、ポンド。

「さ……才葉さま！ 酷いです！ わたくしを大切としないのですか!？」

俺はフツと口元を緩め、ポンドを見つめた。

『俺はお前のことを大切に思っている。だからこそ、こつやっつて戦わせているんだ。大切にしていなかったら、今頃お前の感情プログラムを消し去っているからな』

『お……恐ろしいことを言うな!』

『冗談だ。そこまで俺は末期ではない。恐らく本当に末期が起きる時、それはポンドがデリートされた時だろうな……』
苦汁を飲んだような表情を浮かべ、ポツリと言葉を呟く。

「才葉さま……」

そうしている間にも、ロックマンがウィルスでデリートしている。

ポンドは、仕方ないのでロックマンの援護を行い、ウィルスをデリートしていた。

良いコンビネーションだ。

『やっぱり女守と俺のコンビネーションは抜群だぜ!』

『ああ、全くだ！ 面白い、これはさいつこつに面白い!』

もはや悪人面をした俺たちは、ものの数分でその場に居た全てのウィルスのデリートを完了させた。

「ほう。雑魚のクセにやるな。そして流石は最強と云うべきだ。こんな短時間で、ウィルスどもをデリートするとは」

「ボクとポンドの絆がある限り、決して負けはしない!」

「さ……さつさとお縄につきやがれ!」
急に強気になるな。そして少しずつ後ろに引くな。ビビっているのがまる分かりだ。

しかし、とロケットマンを睨む。

コイツからは、凄まじいオーラが放たれている。多分、ロックマンもそれを感じているであろう。

それに、

『1対2の状態で戦うのか？ 確実にお前の方が不利だ』

「流石の俺でも、最強と雑魚相手に引けを取る訳がないが、今回は別だ。ついさつき次の仕事が入ったから俺はここで失礼させてもらうとする。だが……」

踵を返すと、顔だけをこちらに向け、一言。

「次会った時、それはお前らの死を意味する」

『待て！ 逃げるのか卑怯者』

『いや、これは逃げるといふよりも退散するって意味の方が正しいな』

ピシユンと音が鳴ると、ミサイルマンは消え去っていた。

少し不満気な熱斗だったが、俺が「残念がるな」と後押しをする。

『今回のナビ、ロックマンも感じていたのか？ いや、この調子だと熱斗も感じているな』

しばらく沈黙が続いたが、2人がコクンと首を縦に振る。

「うん。今までに戦ったナビとは違った雰囲気か漂っていた。あのまま戦って、勝てるかはわからなかった」

『だが、徐々に強い敵と戦えると思ったのになー』

………。呑気だな、お前は。

だが、その呑気さがコイツのいいところでもあるのであろうな。

細かいことは気にしない。それよりも今日の晩飯は何だろうな？

それがコイツの大体合っている性格だ。

だからこそ、人望が厚く、慕われやすい性格なのである。隣町の一匹狼の不良でさえも、コイツとはいい仲である。

それに比べ、俺と来たら………な。

急に暗い顔をしたのを気づかれ、熱斗が「どうした？」と聞いてきた。

『いや、なんでもない。それよりも早くプラグアウトしよう。今日はパトロールも終了したし、ナビもボロボロじゃねーのか？』

『確かに。全く、今日は久々にアレほどのウィルスと対決してしまったぜ。熱くなりすぎちゃったかな？』

「熱斗くん。ウイルスバスティングになるとボクの状態を気にせず
に戦わせるからね。たまにはナビの状態も考えながら戦わせてほし
いよ……」

などと呆れながらロックマンは溜息を付く。

『しかしだ。アイツはこのエリアに何かがあつたつて言つたよな？』

『言つたな。組織が欲しいものだつて』

となると、再びこのエリアに来る可能性は無いとはいえない。

『だったら今のうちにせらしきプログラムを回収しておこう。じ
やなければ、今度は秋原町がテロの目標になる可能性がある』

2人に、緊張が走る。

「確かにそうだね。一体何を狙つてこのエリアに侵入したのか、確
かめる必要があるようだね」

『行こうぜロックマン。この町の平和のために』

「うん、分かつたよ」

そう言つて、ロックマンは奥へと進んでいった。

「そ……それでは才葉さま。わたくしはここでプラグアウトを・

……」

『お前も行くに決まつているだろ』

「で……ですよね」

泣く泣くという表現が似合うほどに、肩を落としながらポンドが重
い足取りで進んでいった。

```
0 1 0 1 0 0 1 0 0 0 1 0
1 1 0 0 0 1 1 0 0 1 0 1 1
1 0 0 0 1 1 1 0 0 1 0 1
```

最深部まで行くのに、さほど時間はかからなかつた。

途中で欠落した足場などはあつたが、別ルートで何とかなる程度だ
つたので短時間で行けたのだ。

「ここは……?」

ロツクマンが辺りを見渡す。

俺はその光景を見るなり、頭が痛くなった。

『つく……』

『大丈夫かよ女守。この場所は、お前が……』

『言つな！』

心配そうにしている熱斗だが、それは大きなお世話だ。

苦虫を噛み潰したような後味の悪い感触が、俺の中を流れ始める。

「才葉さま。もしかしたらあのナビ。才葉さまが作り上げたあのプログラムを探しにここまで来たのでは？」

ポンドが突然そう言った。

確かに、あの時作り上げたプログラムは、その後突然姿を消した。

誰かがデリートしたのか？ はたまた回収したのか？

真相こそは誰も知らないが、とりあえずなくなったのでそれでよし。というわけである。

『……ん？』

俺は何かのカケラを見つけた。

『ポンド。それを取ってくれ』

「了解しました」

つたつたと側まで早歩きで近づき、そのカケラを回収する。

案の定、それは優しいプログラム、最後のカケラである。

『よっしゃ！ やったじゃねーか、女守！』

『そうだな。これで無駄に集めた甲斐があったというものだ』

もはや女守の部分はスルーし、集まったことに対して喜びを分かち合っていた。

と、不意に隣に別のプログラムが落ちているのを確認する。

『それは何だ？』

ポンドが手に取ると、情報解析を開始する。

「これは……ナビの残像データですね。恐らく自爆か何かで残ったプログラムではないのと思うのですが」

そうか。と俺が言うと、とりあえず明日、科学省に持っていきこうと

思いそのプログラムをPETの方に移した。
しかし妙だ。

どうしてこんな場所に、自爆と思われるプログラムが落ちていたのか？

それに、以前ここにいた時にそんなプログラムは確認しなかった。スパイラルによって出来たプログラムかとは思っても、あのプログラムは破壊したプログラムでさえも吸収して自分の物とするプログラムだ。

残像プログラムが出てくるわけがない。

だとすれば、奴らは一体何を狙っていたのか？

ここにあるナビプログラムか？ それとも、もっと重要な……。

探して。

突然、脳内に声が響いた。

『だ……誰だ！』

「どうされました？ 才葉さま？」

……お願い、バグのカケラを……探して！

『バグのカケラ？ ロックマン、その辺にバグのカケラらしき物はあるか？』

「才葉くん？ どうしたのいきなり」

『早くしろ！ 誰かが、俺の脳に訴えかけているんだ！ 凄く、慌てた様子で』

さつきから誰かの声が脳に響く。

それだけで、何かを信頼できるとは思っていない。

だが……。

「分かった。熱斗くん！ 周囲を見渡して、何かある？」

『うーん。何も見当たらないけど……ん？』

こうやって、こいつらは探してくれる。親切心が俺の想像する以上あるからこそその行動だろう。

と、熱斗が何かを見つけているようだ。

『ロツクマン、あそこにあるアレ？ 何かを調べてくれないか』
熱斗が指差す先に、何か大玉サイズの黒っぽい物体がある。

「ちよつと待つて………」

ロツクマンはすぐに、黒っぽい何かに手を触れさせる。すると、莫大な量のデータが出てきた。

それを読み込むと、急に驚愕な顔つきになる。

「これは！ 究極のバグ集合体に似たプログラムだ！ 中に、強力なバグのカケラが眠っているようだよ！！」

究極のバグ集合体？ 確か、こいつらが倒したと言われている、ゴスペルが作り上げたプログラムか。

それに似たプログラムってことは、それ関連の………。

俺が思い当たる節で言えば、4年前に起こった事件でそれが浮かべられた。

そう、人工的に作られたあちらとは違い、自然的に発生したバグの集合体。

その名も、グレイガ。

『熱斗！ このプログラムは危険だ！ 待っている………』
PETの目の前にあるパソコンのキーボードを取り出すと、とあるソフトを起動させる。

俺はキーボードを指定の位置に固定させ、まるでプロが奏でるピアノのようにキーボードを打つ。

カタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタ………

こうなれば、誰も止められない。

プログラム作成中の俺は、周りの声などまるつきり聞こえなくなり、完全に孤立した存在となる。

そして、最後の文字を入力し終えたら、エンターキーを流れるようにして軽く叩いた。

すると、ポンドの目の前に大型のカプセルが現れる。

ニユツと、そのカプセルから腕が生え、目の前にある巨大な物体を持ち上げると、パカツと空いたカプセルの中に収納した。

これでとりあえず、バグのカケラが暴走したりすることはない。

『お・・・おお！　すげーじゃん！　あの短時間でよくぞそんなプログラム作れたな！』

「でも、そのプログラムどうするつもりなの？」

ロツクマンが不思議そうに聞いてくる。

『無論、科学省に届けるつもりだ。いくら俺が作成したプログラムでも、数日も経てば暴走する可能性だってある。それだったら、科学省に届けた方がいい』

そう答えた。

ホツと、胸をなでおろしている。

「わかったよ。でも、気をつけてね。もし、そのプログラムがポンドを取り込んだら・・・」

「怖いことを言わないでください！」

涙目でロツクマンに訴えている。

リアルに取り込まれるという部分が怖いが、こいつのせいで台無しだ。

『だが、それもいいところと受け取ってしよう』

「・・・？　何か言った、才葉くん？」

ロツクマンが振り向く。俺は「いいや、別に」と素振りを見せる。

『それじゃ、また明日な。遅刻だけはするなよ？　キング・オブ・遅刻さんよ』

『う・・・うるさいやい！　それだったら明日の実習中行方不明になるなよ。キング・オブ・授業サボり魔！』

お互いに貶しながら、2体のナビは同時にプラグアウトを行った。

その日は、ご飯を食べて、風呂に入って、それで寢床に入って終了した。

第1話中終わり、第1話下へ続く

第1章中（後書き）

ご指摘、感想などがありましたら感想にお書きください。皆様の率直な感想をお待ちしております。

第1章後半（前書き）

意外と長くなってしまったことに後悔する俺。

第1章後半

・・・貴方は、何を望むの？

突然、何を言われたかと思えば、そんな問いだ。

それに、突然でスマンがここはどこだ？ さっきまで俺は風呂に入
って、それで寝て・・・。

そうか、夢か。

・・・夢。確かにこれは夢。でも、夢で済まされないことだっ
てある。

夢で済まされないこと？

そう、例えばさっき貴方が回収したプログラム。アレは本当は回
収してはいけなかったプログラム。

回収してはいけなかったプログラム。じゃあ、何であの時見つけて
と頼んだのだ？

・・・そ、それは。

お前がどこかで、あのプログラムの危険性を察したから、誰かに回
収させようとしたんじゃないのか？

・・・それは、違う。

そうか。でも、明日で全てが終わる。科学省に持っていけば、少な
くともテロリストに回収されることはない。

・・・それも違う。世の中には、回収できないプログラムなん
てない。どんなにプロテクトをかけてても、結局はそれを外すナビ
が現れる。

・・・つまりは、何を言いたい。

本来、あのプログラムや私、更にはカーネル兄さんのプログラム
はインターネットに放浪させるべきだった。でも、貴方が全てを回
収してしまった。これでもう、再び大事件が起こりうる。

・・・大事件、だと？

そう、貴方自身、薄々感づいているでしょ？ 自分自身が作り上

げた、プログラムを。

っ！！ 俺は……俺はもう！

……？

また、何かを失うのか！？ 俺は、信頼を失い、父さんも失い、拳
句の果てに、一度母さんまで失いそうになった。あの事件でさえも
俺は、生きる勇気を失いかけ、熱斗に助けられた。だが！ 今度は
そうはいかないハズだ！ 俺に巻き込まれて、熱斗を失いかねねー
んだよ！

……貴方も、熱斗に助けられた人間なのね。今熱斗はどう
している。

あ……ああ。熱斗か。今アイツは、楽しんでいるよ。

……そう。私がいなくなつて、寂しがっていると思つてしま
つたけど、そうじゃないのね。

……お前の都合なんぞ知つたことじゃないが、多分お前を失つ
て悲しんでいるとは思つぞ。

……どうして、そう言い切れるの？

だってさ、アイツは他者の心を自分の心に置き換えるヤツだ。そん
なアイツが何かを失うというのは、あまりにも過酷だったハズだ。

……。

お前が誰かは知らないが、もしもお前が亡くなっている身であるの
なら、その辺は勘違いするなよな。

……カーネル兄さん。貴方が行ったこと、無駄じゃなかった
のね。

……。

……私は、ある人を救うために自爆したプログラムの一部。
でも、優しさのプログラムを備えてしまったが故に、自爆寸前で融
合を解除され、プログラムとなつてあちらこちらにバラバラとなつ
て散乱した、全てのナビを操ることのできる、ナビゲーション型ネ
ットナビ。

それが、お前なんだな。

・・・コクリ。

・・・そうか。お前も、大変だったんだな。

0 1 0 0 0 1 0 1 0 1 0 1 0 1 0
0 0 0 1 0 1 0 1 1 0 0 0 1 0 1 0 1
1 1 0 1 0 1 1 0 1 0 1 0 1 0 1 0 1

そして、次の日である。

いつものごとく学校に行き、熱斗達と出会う。

「おはよう熱斗。今日も元気で何よりだ」

「おはよう女守。今日も根暗そうだな」

「ほっとけ」

180度真逆のあいさつを交わすと、隣にいたちよつと体格が大きい男子に話しかけられた。

「おはよう才葉！ 今日も熱斗と楽しい談話か？」

「アレのどこが楽しい談話なのかを聞きたい気持ちは俺だけか？」

疑問を持つも、その男は「気にするなつて」と肩をバンバン叩く。

「あの性格は昔からだからな。ライバルである俺が言うから間違いないねえな」

しかし、そこだけは小声で言われた。

コイツをライバル視しているかは触れてはいけないような気がする
ので触れないでおく。

これもまた、親切心だ。

『ガッツ！ 才葉は多分、失礼なことを考えたでガツスな！』

やべっ、読まれている。

しかし、そんなことも気にする様子はない。

ここまで肝っ玉が太い男。デカ才は俺にとっても頼もしい存在だ。

何といっても、コイツの性格はとにかく今では珍しいガキ大将に相
応しい態度であるが、仲間のためなら体すらはれる。

俺も見習うところがたくさんある熱斗の昔からの友人である。

「ところでデカオ。今日の科学省見学、お前はどこを見学するんだ？」

「俺か。俺はな、市長になるためにまずは制度について勉強をした。だから、データベース室を見学する予定だ」

なるほど。コイツっぽくていいかもな。

「それじゃ、俺はちよっくらトイレに行ってくるぜ」

トイレぐらいガマンせずに行け。とツツコミを入れ、デカオはトイレに向かってまっしぐらだ。

「……熱斗」

「何だ？」

「一瞬、このことを言うかどうかを迷ったが、言わなければ始まらない気がしてならなかった。」

「俺、昨日不思議な夢を見たんだ」

「夢……？」

『それは、どんな夢なの？』

ロックマンも、興味深そうに聞いてくる。

「声が聞こえてきたんだ。その声は、どこか優しさで満ち溢れ、でも悲しさがある。そんな声だった」

『それで、何か言っていたのかい？』

「ああ。俺が回収したプログラムは、回収するべきではないと言っていた。アレが、とんでもない事件を引き起こすとアイツは言っていたからな」

あの時に見た夢。

アレを夢として受け取ってはいけないような気がする。そう、俺の本能が言っているのだ。

「でも、夢は夢だろ？ そう気にすることはないって
そう、熱斗は言ってくる。」

しかしだ、アイツは最後に、これを言えば熱斗でも信じるという言葉を言ってくれた。

その言葉を、俺は、ハッキリと、告げた。

「例えその話が、アイリスからの話だとしても……同じことは言えるか？」

アイリス。多分アイツの名前だと思っ。

女性っぽいから、女性なのであろう。

しかも、その言葉に熱斗とロックマンは固まった。

「……アイリス、だっ」

『やっぱり、あのプログラムは……』

2人して目を見開いている。

そうじゃなければ、アイリスは熱斗のことを知らないであろうからな。

「……でもさ、アイリスが言ったにしても俺たちでどうになるだろうしさ、気にするなっ」

いや、そういう問題じゃねーだろ。

呆れていると、

キーン、コーン、カーン、コーン

チャイムが鳴った。

それと同時に、デカオがトイレから戻ってくる。

「どうしたんだ。そんな葬式帰りの参列客みたいに？」

重苦しい空気が、俺の周りを制圧していた。

そうしていると、担任である火野ケンイチ先生が教室に入ってくる。

「みんな、席に着け」

メガネをかけ、赤く長い髪に髭、粗野つきの顔つき。それでもどこか男っぽい先生。

この先生は、ある意味自分に正直な先生である。それがために、一部の生徒や先生から信頼を得ている先生なのである。

俺も、この先生は好きだが。

通称ヒノケン先生とも呼ばれている。

そのヒノケン先生が、かつたるそうに教壇に立つ。

「知っての通りだが、今から俺たちは科学省見学に向かう。決してだが、科学省を襲おうなどとは思わないように。以上」

何の忠告なのかを教えてもらいたい。

そう思うも、それは熱斗も同じだった。

「ヒノケン。お前じゃないんだから誰も襲おうとは思わねーよ」

「うっせえ。今じゃ俺だって改心したっつーの」

「……。そういえば、ヒノケン先生って、前科持ちだったよな。だったらその冗談を言ってもおかしくないか……。って！」

「笑えねーよ！ 前科持ちのヤツから言われても何のジョークにも聞こえねーよ!?」

俺が冷静さを失い、ツツコミを入れる。

すると、ヒノケン先生が俺に向かって、親指を突き立てる。

「ありがとよ。他のクラスの連中にやってもそんなツツコミはなかつたぞ」

「知るか！ お前はツツコミを待っていたのかよ!？」

相変わらず思考の読めない先生だ。

ヒノケン先生。ある意味、生涯出会う先生の中で、特に心の中に残る先生となるであろう。

「……さて、そんなジョーダンは置いておくが。言うこととあれば、決して科学省の職員に迷惑をかけるな。以上だ」

そう告げると、再びかつたるそうに教壇から降りてさっさと廊下に出ると、だるそうな足取りで職員室に戻っていった。

「なあ、熱斗」

「何だ？ ヒノケンの性格なら、昔からあんな感じだぜ。それよりも、早く行こうぜ。どうせ各班、自力で行かなければならないと思うしな」

だろうな。どうせヒノケン先生のことだ。

お前らの旅行費は出してやる。だが、バスを呼ぶほど俺はヒマじゃない。だから、俺を含むお前らは自分たちの足で目的地までたどり着け。

「……って魂胆だろうな。」

教員としてどうかと思うが。その考え。

そう思っていると、後ろからメールが話しかけてくる。

「あれ、熱斗たちはどうするの？ 確かこの実習は、科学省とは別に、官庁街にも行けるらしいけど。デカオ君は官庁街に行く気満々だったけど？」

突然、メールからそんなことを言われた。

「……何だか、話の内容が大分変わっているような気がするんだけど。」

「俺は無論科学省だ。熱斗は？」

「俺もだな。将来のために、学べることを学ばなければな！」

おお、勉強嫌いのコイツがそんな言葉を口にするとは！

さては、変なものを食ったな。

「で、本音は？」

「……メール？」

「本音は？」

「……実習が面倒だから、パパの研究所に逃げ込もうと思っていました」

だろうな。変だと思ったら、そういうことか。

「それでも、勉強させられる羽目になると思うぞ、熱斗」

「いやあああああああ！！！」

熱斗が絶叫しているのを、ただ黙って見つめるのであった。

0 1 0 0 0 1 0 0 1 0 1 0 1 0

0 0 1 0 1 1 1 0 1 0 1 0 1 0

1 1 0 1 1 0 1 0 1 0 1 0 1 1

地下鉄に揺られ、数分後。

目的地である科学省に到着する。

耳からイヤホンを抜き、ポケットの中にしまう。

PETの情報を確認し、すぐさま熱斗とメールと共に科学省の中に入る。

途中で、後ろの方から怨念がかった声や視線を感じたんだが、気にしたら負けのような気がするので無視する。

「それにしても、相変わらず広いな」

「そうね。流石は熱斗のお父さんが働く施設とでも言うべきでしょうね」

メールと共に苦笑する。

ところで。と、熱斗に聞く。

「いつもなら表を見てハイさよなら。で終わるはずなんだが……
・分かってるな」

熱斗は、言葉の意味を察しうなずく。

「そのためのプログラムは持ってきてきているのか？」

「お察しの通り、だ」

P E T に、そのプログラム情報を提示する。

ロックマンにも、それを確認させる。

『……うん、今のところ特に異常はないようだよ。でも、もし異常があったら……』

「ああ。ロックマンも無事じゃ済まされないだろうな」

2人して、神妙な表情でうなずいている。

何の話だ？ 一体。

「とにかく。さっさとプログラムを持っていこうぜ。ここで無駄話をしていても、先に進まないんだし」

それはお前が言える台詞か？ そう思うも、思っただけで実際には言葉に出していないので気にされず熱斗は1人早々と自分のお父さんがいる研究室に向かうのであった。

よくぞまあ、場所を知っているな。

無駄に感心しながら、俺もその後ろを追いかけることにした。

「……ちよつと！？ 私はどうするの！？」

ハブられていたメールが、熱斗の後を追うのであった。

1 1 0 1 0 1 0 1 0 1 0 1 0 1 0 1 0 1 0

1 0 1 0 0 0 1 1 1 0 1 0 1 0 0 0 1
0 1 0 1 1 0 1 1 0 0 1 0 1 0 0 1 0

3階。ネットワーク研究施設。

「パパ！」

熱斗のお父さんを確認するなり、飛びつくように走り出す。

お前は年端もない子供か！

とは思うものの、父親がいる子供は大抵が反抗などで口も聞かないとは思うものの、やっぱり家族愛なんだな。

そう実感する。

「おお、熱斗か。最近家に帰れなくて悪かったな」

「そんなことはいいよ。俺もパパに会えてよかったよ」
ほほえましい、家族の団らんだな。

見ている俺たちですらほんわかとした気分になる。

「それで、今日は何をしにここまで来たんだ？ 学校はどうしたんだ？」

「それは、今日はあちらこちらの見学をするから自由に行動しろとヒノケンからの指示があつてさ。他のクラスは遠く離れた科学省の見学とか行っているにも関わらず。でも、俺はそっちの方がいいかなって」

「ヒノケン。ああ、熱斗が言っていた元WWWWワールドスリーのメンバーで、今は小学校、中学校と来て高校の教員になったヒノケン先生だね。今度会ったら挨拶しておかないとな」

優しい眼差しで熱斗たちを眺めている。
すると、

「勘弁してくれ。俺は一度お前を殺しかけたんだぞ」
当の本人であるヒノケンがその場に現れる。

「やあ、久しぶりだね、火野ケンイチくん」

「ったく、アンタも熱斗と同じで人に甘いんだか何だかだな。しかし、それがいいところなんだろうな。いいところが似たもんだな。」

熱斗も、祐一郎さん、アンタも」

多分褒めているんだと思うが、それでも呆れたような口調でしゃべっている。

「それで、今日はどんなことを学びに来たんだ？」

「……。学びに来たのもあるが、

熱斗と俺は目を合わせる。

「実はパパ。見てもらいたいものがあるんだ」

「見てもらいたいもの？」

俺が前が出る。

「はい。とは言っても、立ち話だけじゃアレですから、これは直接見てもらった方が分かると思います」

どこか安全なコンピュータがないかと教えてもらい、近くにあったコンピュータに自分のP E Tを近づけると、そこに向かってナビマーク部分を押した。

「プラグイン、ポンド。トランスミッション」

とりあえず、昨日回収した強力なバグのカケラを画面に提示する。

「これは……まさか!!」

祐一郎さんも、その正体に気づき目を見開く。

「昨日少し調べましたが、とんでもないことが発覚しました」
そのデータを、皆に閲覧させる。

「このプログラムから出てきたデータを慎重に解析した結果、2つのプログラムが出てきました」

「2つのプログラム？」

「何だ、それは？」

言いにくい言葉をどうにかこじ開かせ、更に話を進める。

「はい。1つは数年前、ネットファイア『ゴスペル』と呼ばれる組織が作り上げられたプログラムに酷似しており、もう1つは熱斗から見せてもらった過去の戦闘データや、ロックマン内に残っていた微かなデータを解析して導き出されたプログラム。数年前に全世界のコンピュータを死に追いやろうとしたプログラムに似ておりまし

た。ここから分かったこと。それは……」

その場にいた人全員が、息を呑む。

「恐らく、ネットを彷徨っていた究極のバグのカケラ集合体と、自然に出来たバグのカケラ集合体が融合してできた最悪のプログラム。螺旋のような形状をしており、更に俺が修復したプログラムを取り込んだ、破壊と吸収を好む、これまで以上に厄介な、この世にあってはならないプログラムとなっていました」

最後の、俺が作り上げたという部分を強調する。目を逸らしてはいけない事実だからだ。

「……おい、それってプロトよりも酷いのか？」

ヒノケン先生が口を開く。

「はい。プロトのことはある程度熱斗から聞きましたが、プロトと同じぐらい。いや、プログラムを取り込むというのは同じでも、破壊したプログラムまでもを吸収するという時点で、プロト以上に厄介なのは間違いありません」

シンと、辺りが静まり返った。

とんでもないプログラムを発見したものだな。俺たちは。

「俺はこのプログラムを、螺旋のような形状から見て『スパイラル』と名づけたいと思います」

最後に足しを入れ、俺も黙り込む。

「……科学省にいる全職員を集めてくれ。緊急会議を行う」

祐一郎さんがそういうと、周りにいる職員が慌しく行動する。

「熱斗、ロツクマン。それに……」

「才葉です。才葉女守」

「女守くん。ありがとう。こんなプログラムを放っておいたら、ネット上でこれを狙う犯罪者が出てきたかもしれない。それを未然に防いでくれたことに感謝する」

一礼して、その場から立ち去ろうとする祐一郎さん。

しかし、忘れてはならないことがもう一つあった。

「しかし、もう手遅れです。すでにそのプログラムを狙って動き出

した犯罪組織があります！」

「な……何だつて!？」

驚いた素振りを見せ、こつちを振り向く。

「はい。これもまた最悪のテロリスト。ネットワーク宗教団体スパイラルです」

目を凝らして、その言葉を口にする。

案の定、祐一郎どころか、メイルやヒノケンまでもが啞然とする。

「今度はネットワークテロリストかよ。ヤレヤレ、とんでもないことに首を突っ込んだな。お前らは」

「すいません」

「熱斗。まさかまた、命をかけた戦いに巻き込まれたりはしないよね?」

メイルが心配そうに、熱斗の顔を覗き込む。

熱斗は「心配するな」と言っている。

「例えどんな犯罪組織だろうと、俺とロックマンがいれば解決するつて!」

皆が、啞然とした。

そんな中で、ヒノケン先生が「まあな」と口にする。

「お前は俺がいたWWWを3度潰したガキだ。そんなどこぞのWWWをパクったような組織に負けはしないよな。俺は信じるぜ。再び大事件に発展しようなら、こいつらが止めるとな」

軽い口調の割には、どこか信頼している心が宿っているのが分かる。ただし、メイルは未だに心配そうにしている。

やはり、熱斗の側にいただけはあるようだ。

「……ところで、さつきから妙に腹が痛いんだが。」

「祐一郎さん。すいませんが、トイレ、どこですか?」

多分、朝に賞味期限が1日過ぎた牛乳を母が飲ませたのが原因であるろう。

野郎、いつか覚えてろ。

「どうしたんだい? ガマンしていたのか?」

「さすがに重要な話の途中で抜け出すわけにはいかなかったのですが、原因は分かっていますか」

道理で微妙に牛乳を親切に飲ませていたなと母を疑った。

いつもなら、すでになくなっているのになと思っただが、疑うべきだったか。

『原因って？』

『ええ、才葉^{ちかばな}祈架^{いのか}さまから飲まされた牛乳がすでに賞味期限が切れていたの、それでおなかを壊されたのだと』

「ポンド。余計なことを言うな」

ギロリと、ポンドを睨む。

しかし、徐々に激痛へと変わっていくのが分かってくる。

「それでは、後ほど」と断りを入れ、ダッシュでトイレに直行するのであった。

悲しいきこととは、こういうものだな。

涙が出てきそうな衝動に、襲われるのであった。

0 1 1 0 0 0 1 0 1 0 1 0 1 0 1 0
1 1 0 1 0 1 0 1 0 1 0 1 0 1 0 1
0 1 0 1 0 1 0 1 1 1 0 0 0 1 0 1

トイレ用ロッカーの中にPETを投げ入れ、トイレにすぐさま入り用を済ませる。

半分やつれたような顔つきで出てくると、しっかりと手を洗いロッカーの中にはい投げたPETを回収する。

「死ぬかと思っただぜ。クソッ、あの母。本当にいつか復讐してやる」
ブツブツと言葉を漏らす俺に対し、ポンドが話しかけてくる。

『才葉さま。あの人には敵わないのでは？ 素手で熊を倒すほどのお方ですよ』

確かに、そう考えると無理だと俺も思った。

コンピュータ時代に突入してもなお、毎日腹筋背筋を欠かさず行い、

朝のジョギングを10kmと重たいにも関わらずそれを軽々とわずか30分で終わらせたりと、本当に人間なのかと疑いたくなる。昨日の夜はあの口調だったが、いつもならもつと俺を弄るような口調で話しかけてくる。

誰かにそれを言ったら「あの美人から罵られるとは、お前はいつもご褒美をもらっているようなものだぞ！」と顔を近づかれてまで言われたことがある。

確かに母は美人だ。腹立たしいが。

しかし、中身がまるで悪魔のような母親である。

優しく、家庭的な母親を夢見る俺にとって、あの母は理想とは180度逆さまの母親である。

あえて言おう。

どうしてこうなった!?

でも、料理はうまいがな。

「アレであの性格なのなら残念としか言いようがないな」
深い溜息をつく。
すると、

「どうしたのじゃ？ そんなに深い溜息をして」

ふと突然、声が聞こえた。

振り向くと、右目にレンズをはめ、頭のハゲたおじさんが、車椅子に乗りながらこちらに接近してくる。

あのおじいさん。まさか

「ワイリー博士ですね。お久しぶりです」

丁寧に挨拶をする。

目上の人には、そして尊敬する人には挨拶をするのは基本中の基本だ。

この人、ワイリー博士は、元々WWWと呼ばれる犯罪組織のリーダーだった人である。

ネット社会を憎み、そして壊滅させようとした張本人だが、彼なりの理由があり、そして辛い過去もあったそうだ。

それでも、熱斗に救われ、今では科学省の1人として、自己迎撃システムと自己修復システムの開発を進める科学者となっている。そんな彼も、俺の中ではあこがれるべき存在なのだ。

犯罪者となった俺を励まし、そして悪とは何か、正義とは何かを教えてください。

そう思うと、熱斗の存在がどれだけ大きいのが見て取れる。

「おお、誰かと思えば。女守ではないか。久しぶりじゃの」

「その名前は好きじゃないので、才葉をお願いします」

フツと、他所をむく。

「好きじゃないとは言うが、ワシはこの名前は好きじゃぞ」

「……？ どうしてですか？」

「女を守ると書いて、女守と読む。誰かを守りたいと思う意思が伝わってはこんかの？」

そう言われるとそうだが、でも……。

「俺なんかが、誰かを守れるのでしょうか？ 父親が行方不明で、一度インターネットを壊滅に追い込もうとした、この俺が……」
暗い表情で話す。しかし、ワイリーはそんな俺に、励ましの言葉を入れた。

「確かにそうじゃが、それならワシだってそうじゃ。ワシは目的の為なら、犠牲だって何とも思わなかった。しかし、熱斗がグレイガを倒し、ワシに生きろと言った。ワシはもちろん耳を疑った。生き恥を晒す気かと熱斗に向かって言ったのじゃ。じゃがあやつ、だったら生き恥を晒せと言ったのじゃ。そして、これまでに犠牲になったナビや人々の分まで生きろと言ったのじゃ」

そこからじゃ。と、ワイリーは外を見る。

「ワシの中にあつた、汚れた心が無くなったのは。ワシは言うべきことを言い、祐一郎から必要とされ、そして今に至るのじゃ。もっと熱斗に早く会っていれば、犯罪組織なんぞに手出しをしなかったじゃろうなとつくづく思う」

そこまで必要とされる存在か。

全く、流石は熱斗と言うべきだな。しかし、生き恥を晒せ。そして、これまでに犠牲になったナビや人々の分まで生きる、か。無条件すぎるが、それがワイリーの心に来るものがあつたんだろうな。

そう思うと、笑いが出てくる。

「……………。ところでお前さん。どうしてここに来たのじゃ？」不思議そうに、聞かれる。

おっと、忘れるところだった。

「実は、いろいろと厄介なことが起きてまして……………」

俺は、今までの経緯を簡単に説明した。

それから3分後

0101010101010101010101010

「な…………。なんじゃと！ スパイラルが、ニッポンに！」

何か思い当たる節がありそうな言い方だ。

「あの、ワイリー博士……………」

「成る程。あやつらはとうとうここまで作戦を実行すると言つのか。じゃつたらここは危険だ！」

危険！？ 何が危険なのか、その意味を理解できない。

「近頃、自己迎撃システムと自己修復システムの開発に反対する組織があつたのじゃ。恐らくあやつらは、ここを狙う可能性が高い！」

「なんだつて!？」

しかし、と俺は思う。

どうしてネット社会に安全をもたらすハズの2つのシステムに反対するんだ？

ネットワークに好ましいハズの2つのプログラム。それらに何かしらの事柄があるとも言つのか？

「でも、安心してください。ここには熱斗がいますし、いざとなれば俺もいます。ですので、ワイリー博士は引き続き、2つのプログ

ラムの開発に専念してください。それと……」

もう一つ、この人に渡さなければならぬプログラムがあったのを思い出す。

「これらのプログラムを発見しましたので、博士に渡しておきます」
そう言つて、ワイリーの車椅子に乗っているパソコンにプラグインすると、その中に2つのプログラムを送る。

そう、優しいプログラムのカケラとナビの残像データを。

「これは？」

「インターネット上で集めていたプログラムと、偶然強力なバグのカケラの側にあつたプログラムです。優しいプログラムの方は、すでに全てを回収済みで、あとは修復すればナビが復活すると思えます。ただし、残像データが復旧できるかは分かりませんが……」

「フムフムと頷くと、その中身を確認し始める。

しばらくすると、その目から、涙が溢れているのに気づく。

「ど……どうかされましたか!？」

「……女守よ。おぬしはとんでもないものを拾ってきたものだ。ワシが探しに探した、大切な孫のような存在を、まさか死ぬ前に拝めるとは」

何かは分からないが、とりあえず喜んでいふことには変わらないようだ。

ワイリー。あなたは本当に凄い科学者です。

心残りがあつたのなら、これで解消されたハズです。

いつもなら冷静な俺を、ここまで尊敬させるのですから、これからも長く生きてください。

暖かい眼差しでワイリーを見つめて、笑顔を見せる。

「ビー、ビー、ビー、ビー、ビー、ビー！」

「な……何だ!？」

突然の警報に、ワイリーと俺は動揺する。

『シンニユウシャハツケン、シンニユウシャハツケン！ 科学省ノ
電腦世界ニテ、謎ノナビ出現！ 警戒態勢ヲAニ指定』

「警戒態勢Aじゃと！？ それほどまでに危険なナビが現れたとでも言っのか！？」

クツ、とワイリーは歯をかみ締める。

予定外の出来事に、俺もしかめっ面をする。

恐らく、進入してきたナビは、スパイラルの刺客と見て間違いない。だったら、ロックマンと俺で止めるのが普通だろう。

「ワイリー博士！ どこかプラグインできる場所は？」

「行くと言っのか！？ よさんか！ おぬしで勝てる相手ではない
！」

「だとしても！ 何かを失うよりはまだマシだ！ 俺はもう、何かを失うのがもうゴメンだ！」

ここには熱斗の父親、科学省のみんな。更にはメール、ヒノケン先生。学校のクラスメイトがいるのだ！

このまま放っておくわけにはいかねーだろ！

「……分かった。近くにこの科学省の電腦世界に入れるスポットがあるはずじゃ！ そこからなら、ロックマンと合流できる可能性がある！」

「ありがとう、ワイリー博士！ さてと」
そこいらを探しに探す。

すると、とある1ヶ所に目線が行く。

廊下にある、防犯シャッター部分にプラグインできる場所があった。「ここなら！ 行くぞポンド」

『了解です。しかし……』

「ごたごたなら後にしろ！ 今は一人でも多くの奴らを救えるかが問題なんだ！」

『りよ……了解しました！』

相変わらず、心配性なナビだ。

だが、臆病なほど生き残る率が高くなると聞いたことがある。
フラグはつねに破壊しろ！　ってね。

「プラグイン！　ポンド、トランスミッション！！」

防犯シャッターのセンサー部に向けPETを向けると、赤い光が一
直線にセンサーに向かって放たれる。

PETの画面から、ポンドの姿が消えた。

```
0 1 0 1 0 1 0 1 0 1 0 1 0 1
1 1 0 1 0 1 0 1 0 0 1 1 0 0
1 1 1 0 1 0 1 0 1 0 0 0 1 1 0
```

入り混じっている道を突き進み、途中で現れたウィルスをことごと
く倒していく。

しかしだ、

『いくらなんでも多すぎるだろ！　このウィルスの数、半端じゃね
ーぞー！』

「確かにです。このまま仕事を増やされたら、こっちの身もちま
せん」

『お前の身なんて聞いてはいない』
「酷い！？」

などとコント紛いなことをしつつも、奥に奥にと進んでいる。
横からメットールが現れ、ポンドに襲い掛かる。

だが、

『見え見えだ！　自分の力で自滅しろ！　バトルチップ、メットガ
ード！　スロット、イン！』

巨大がメットールのヘルメット状の盾が目の前に出現する。
攻撃したメットールは、衝撃波を防がれた挙句、メットガードから
衝撃波が発生する。

避けられず、直に当たり消滅した。

「あ……ありがとうございます！」

『礼なら後で言え。今は目の前に集中し……あぶない！ 右だ！』

突然、謎のバイクがポンドに向けて突進してきているのを確認した。……それにしても、何でバイク？

「うおおおつと！ 危ない！」

ギリギリで、ポンドは左へ避ける。

元々ポンドがいた空間に、1台のバイクが通り過ぎる。

そして、そのバイクが人間型へと変形する。

やはり、アレもナビなのか。

「へっへー。俺の攻撃をよけるとは。なかなかやるな」

ニヤリと、顔がニヤついている。

ポンドはへっぴり腰で敵を威嚇している。

……殴っていいか、こいつ。

「だ……誰です！」

『いや、お前は何様だよ！ 威嚇するならせめて腰を抜かすな！』
情けなくなってきた。

俺、戦いに参加すべきじゃなかったのかもな。

今更になつて後悔する。

「はっははは。オペレーターはしっかりしていても、ナビがこれじゃ話にならねーな」

「何だと!？」

おっしやる通りでございます。

「俺の名はニトロマン。スパイラルのメンバーであり、同時にコンピュータ関連のバグを引き起こすのが得意とする、テロリストだ」
再び、どこか狂気に満ちた笑みを、浮かべる。

「ふ……ふふふふふん！ そそそそそそ、それがどうしたと言つのですか！」

『ビビりすぎだ。愚か者が』

『いや、本当にすみませんねワイリー博士。こんなナビで』

もはや不安要素しかなくなってきた。

だがアレだ。ここまで来たんだ。コイツは非戦闘用のナビでここまで戦ってくれたんだ。

そろそろプラグアウトしてもよさそうな雰囲気だ。

『近くにロックマンがいるかも知れないな。逃げよう、ポンド。』

多分、コイツはお前が勝てる相手ではない』

「そうですね。わたくしが戦って勝てる相手じゃなさそうですね。逃げましょう」

PETをセンサーに向け、カチツとナビマークを押す。

しかし、いつまで経ってもプラグアウトされる気配がない。

・・・おかしいな？

「おおっと、言い忘れていたが、すでに科学省のコンピュータにプラグインしたナビは、プラグインした場所からでないとプラグアウトできないように細工しておいた。これでお前は逃げられまい」

「何ですとおー！」

それはこっちの台詞だ！

チツ、迂闊にプラグインするべきじゃなかったのかもな。

誰かを守りたい一心に、バカのようにノコノコと出てきて、そしてやられる。

つ！んなことにだけは絶対にならねえ！ いや、ならせてたまるか！

『仕方が無い！ コイツを黙らせれば片が付くことだ。やるぞ、ポンド！』

「は・・・はいいい!？」

絶望の色に染まった顔つきを見て、少々不安だが、

俺はポンドに向かって、笑みを浮かべた。

『安心しろ。俺はお前を信じている。だから、お前は俺を信じる』

その姿を見てか、さっきまでとは打って変わって真面目な雰囲気を漂わせている。

「分かりました！ わたくしは才葉さまを信じます！」
都合のいいナビだ。だが、それでこそ俺の相棒だ。

「覚悟はできたみてえだな！ だったら、死ね！」

ニトロマンが、バイクの形に変形した。

そしてそのまま、ポンドに向かって突進してくる。

「あわわわわ！ どうしましょう！」

『落ち着け！ 動きさえ見ていれば、予測ができるはずだ……』

直線で、こっちに向かってきている。

だったら、衝突する直前で横にかわせば反撃の意図が見えるはずだ！
ポンドとの距離、わずか3mになった時点で俺が叫ぶ。

『横にズレろ！』

ポンドは慌てるように横に向かってダイブする。

案の定、ニトロマンはポンドがいた場所を、通過した。

『これで反撃すれば』

バトルチップを構える、が。

「甘々なんだよ！ 少しはこっちの考えも読めってね！」

ドリフトで一気に方向を逆に変えると、再びポンドに向かって突進
をしてきた。

コイツはやばいな！

『そう簡単にやられはしないか。だったら、バトルチップ、フユウ
バクダン！ スロット、イン！』

ポンドの目の前に、フヨフヨと浮かぶ何かが見れる。

それに気づいたニトロマンは、声で驚愕をこちらに伝える。

「なにー！」

流石にスピードが出ているだけあって、それを避ける術はないらし
く、浮遊物に特攻した。

ズドオオオオン！

爆発が起こり、腰を抜かして逃げていたポンドが吹き飛ばされる。

「うぎゃあー！」

そっちの心配などせず、煙が上がっている方を見つめる。

やったか？ いや、恐らくこの流れはまだ健在フラグだな。

『アヤツは、A級テロリストのウルじゃ！ 姿を見かけなくなったと言われておつたが、まさかニツポンに来ていたとは！』
やはり、テロリスト！

『フン、知識が豊富なジジイだ。正解だ、俺の名はウル。今現在、科学省を制圧しているテロリストだ。しかし、まさか俺のナビの1体をここまで愚弄しているとはな。少年、只者じゃねーな』

『褒め言葉として受け取っておいてやる。で、そんなテロリストが、一体何の用だ？ 今更降参か？』

『バカを言え。すでに俺の目標である、強力なバグのカケラの回収に成功している』

一瞬、何を言われたのかが分からなくなった。

え、バグのカケラ。それに強力な……。

『何だと！！』

最悪な事態に発展した。

まさか、あの短時間ですでにバグのカケラを回収しているとは……。

そつだ、熱斗は？ ロックマンは？

『お前、俺の仲間をどうした！』

『ああ？ お前の仲間？ ロック何とかってヤツなら、俺の持ちナビの1体であるミサイルマンのコピーと戦わせた。今どうなっているかは知らないね』

『コピー！？ まさか、コイツ！』

『最初から、ロックマンには目を向けていなかったと……』

『いや、当初の目的ではミサイルマンのコピーを戦わせ、弱っているところを持ちナビの1体であるニトロマンに襲わせようと思った。だが、ここで道草をしていたおかげで、ずいぶんと梃子摺ってしまったがな』

「チツ、うつせーな。コイツが出てきたから、さっさと始末しようと思ったただけだ」

『……まあいい。結果として、バグのカケラは回収できたから

その場に、1体のウイルスが現れる。

巨大なキャノン砲を肩にくっつけ、腕にはバスター。そして足はホバーと、出鱈目な姿をしたウイルスである。

「何だ、この格好悪いウイルスは？ 邪魔だ、消えろ」

ニトロマンがそっちに向かって歯車を投げようとした。すると、

ズゴオオオオオオン！！

歯車を持っていたハズの手が、両方吹き飛ばされていた。

「……………え？」

続いて、その体に、バスターが連続して発射される。

元から弱っていたニトロマンの体に無数の穴が開く。

「……………俺が、死ぬのか？」

そう呟いた直後、ニトロマンは爆発を起こした。

何が起こったかが理解できたワイリーは、慌てて俺を揺らす。

「やめんか！ おぬしはインターネットを破壊する気なのか！？」

……………ハッ！

「俺は、今まで何を？」

「まさかおぬし、無意識の内にあんな化け物を作ったのか！？」

「化け物？ 一体何の……………」

視線を、なぜか持っているパソコンに向かわせる。

そこには、無差別にものを破壊する、ウイルスの姿が映し出されていた。

「……………え？ これって、一体」

「おぬしが作り上げた、ウイルスじゃ。ポンドを守るようにプログラムされているようじゃが、全てのものをポンドの害と見なししているのじゃろうな。ありとあらゆるものを破壊しておる」

ウソ……………だろ？

俺はこんなプログラム、作った覚えがないぞ。それに、ポンドに刃が刺さった後から記憶が全く無い。

だったら、本当に無意識のうちにあんな化け物を。

俺は……俺は、本物のバカだ！

ポンドにバカと貶す資格が、どこにもない！

『俺は再び、3年前の悲劇を、また繰り返そうとしているのか。そんな、俺が自分勝手だったために……』

廊下の窓に映った自分の姿を見る。

ただ呆然とし、何もかもが絶望的な目となっていた。

膝が折れ、手を床につく。

『俺は……俺は……』

もはや絶望しかない思考に、声が届く。

「任せてください……才葉さま」

……え？

パソコンを見れば、俺が作り上げたウイルスにしがみつくとポンドの姿があった。

確かにこのウイルス、長距離戦闘用だ。

だから、ああやればウイルス自身はどうすることもできない。

それ以前に、そもそもアレはポンドを守るために作られたウイルスだ。

ポンドを破壊するようにはできていないはずだ。

『だが、何をするつもりだ？』

俺の問いに、ポンドは、答える。

「簡単です。わたくしごと、このウイルスを自爆させます」

オイ、それって！

『やめる！ そんなことをやれば、お前の命は……』

しかしポンドは、その言葉に、感動を覚えているようだった。目を瞑り、静かに答える。

「才葉さま。ナビはプログラムされてできる存在です。多くの人間はわたくしたちのことを道具としか思っていないでしょう。しかし、才葉さまはそうではない。わたくしのプログラムを、命と言いました。我々ナビに、命なんてものは存在しません。しかし、生きていくことで、それだけで命があるのですね」

『ああ、そうだ！ 生きている時点で、たとえ機械だろうと、花であるうと、その中には命があるんだ！ だから、その命を……デリートさせないでくれ、ポンド！！』
懸命に訴え続ける俺。

だが、ポンドも負けてはいなかった。

「……しかし、ナビゲーターの失敗はナビの失敗です。ですから、これを止めるには、ナビであるわたくしが止めなければなりません！」

『ポ……ポンド』

涙で、前が見えなくなっている。

霞んで、マトモにポンドの姿が見えない。

「さよならです、才葉さま。例えわたくしを失っても、決して自分を責めないでください。それが例え、過去のことがあっても、耐えてください」

ピッ、ピッ、ピッ……

不吉な電子音が、PETから聞こえてきた。

体を動かそうにも、動かない。

そしてついに……

ピ。。。

PETからは音が途切れ、代わりにパソコンから……

大きな爆発音が、耳に届いた。

この事件での死亡者は0だったが、デリートされたナビはポンド1名だけだった。

恐らく、強力なバグのカケラだけが狙いだっただけで、それを回収すると特に研究施設を襲うことなく撤退する予定だったらしい。しかし、ニトロマンが俺に襲い掛かったことにより自体が急転。ポンドをデリートしようとして、突然現れたウイルスに、ニトロマンはやられた。その間に、ミサイルマンは逃げたみたいだが、依然とし

てウルを含めて行方が分からなくなっている。

ニユースでは、ただの奪還事件として扱われたが、一部科学省のコンピュータが破壊されたとも伝えた。

破壊したの？ 俺が作ったプログラムであろう。

ただし、公共の場ではその真実は言われなかった。

俺か？ 俺は今……。

「ポンド……。」

暗い、自分の部屋で、相棒を失った悲しみに明け暮れているのであった。

科学省特別室。ワイリーの研究所

復元された2体のナビが、ワイリーのパソコンにいた。

1体は巨大な剣を装備し、キリツとした大人形のナビである。

対してもう1体。そんな大人の印象とは対照的に、幼い姿をしており、頭にアゲハチョウ形の髪飾りをしている、女の子型である。

大人形のナビは目覚めていないものの、女の子型のナビは、ちゃっかり目を覚ましている。

「……。お久しぶりです、ワイリー博士」

「目が覚めたか、ずいぶんと長い眠りじゃっただろう？」

「……。」

「すまなかった。あの時のワシは、世界を憎み、誰かを利用することしか考えてはおらんかった。じゃが、それも熱斗のおかげで吹っ切れたわい」

「……熱斗くんが。いや、でももう、私はネットナビ。それに、熱斗くんにはメールちゃんがいる。あの2人を邪魔するわけにはいかないし……。」

「……やはり、年頃のお嬢さんじゃの。ナビの分際で」

「申し訳ございません」

「じゃが、それもいいかも知れんのう」

『……………?』

「じゃから、熱斗のことは諦めているのじゃろ？　じゃったら、新しい恋に、芽生えてみないかのう?」

『新しい、恋ですか?』

「そうじゃ。どっちにしても、あやつにはパートナーが必要になるじゃろう。あやつは、何かを失うことを、恐怖に思っている。じゃから、失う恐怖よりも、守る意思を強くしてもらわなければな。と思つての」

『……………どんな、人ですか?』

「ハッキリ言ってしまうえば、自分勝手に、鈍感で、バカで、それじゃが、人一倍に立ち向かう心を宿し、誰かを守ろうとする意思が強い、不思議な天才でもあり『天災』じゃ」

ワイリーの視線の先には、更に高性能化した、コピーロイドが椅子に座っているのであった。

続く

第1章後半（後書き）

あとがき

後半から、集中力途切れた……。ダメだ、疲れて死に切れる。
……。特にないですが、一応言っておきます。

始めまして、勢いでロックマン二次小説を書こうと思ったRagoと申します。

ページの都合で、ロックマンたちの行動が描けなかったことに対して若干の苛立ちを覚え、なおかつ欲しいライトノベルがなくて苛立ちを覚え……。って、ダメじゃん。人間的に。

ああ、糖分が不足している。

誰か、糖分を！ 糖分をおおおおおおおお！！

そろそろ危うくなってきましたので（目の前に、一面ラフレシアの花畑が見えてきました）まとめに入ります。

アレです。気まぐれな性格なので特に理由などはありません。

書きたかったから書いただけです。以上。

それにしても、ロックマン6の知識がプレイ動画だけという若干の不安がありますが、大目に見てください。

それでは次回に行く前に、秋原町の掲示板を書いた後に第2章へと進みたいと思います。

恐らく第2章前半は11月〜12月には出来ると思いますが、後半が下手すれば2月あたりになるかも知れませんがご了承ください。

マジでの小説家目指していますので……。

それならこんな書くな！ という問題になります、世の中にはこんな言葉があります。

それはそれ、これはこれ。

それでは、誤字脱字が絶対にあると思いますので（時間が無かった
ので慌てて書いたもので）あった場合はご報告ください。
それでは、次回に向けて、プラグイン！！

11月2日 自宅にて

秋原スクエアの掲示板

1 名無し

どうもこんにちは。

この掲示板は、秋原町やその周辺で起こった出来事を書くための掲示板です。

決して、荒らしや誹謗中傷がないように。

以上。秋原町の町長でした。

2 名無し

<<1

乙

それにしても、最近秋原町もですが、ニッポンは平和ですね。

海外では、イントウなどで大量の死者が出る事件などがあつたにも関わらず。

3 名無し

<<1

乙

<<2

確かにそうですね。イントウでの事件は、ニュースで見たのですが凄まじかったですからね。まるで映画を見ている気分でしたよ。

4 名無し

<<2

確か、テロリストの仕業でしたっけ？ ネットワーク宗教団体「スパイラル」でしたよね？

5 名無し

<<4

正式には、ネットワーク解放団体と言った方が正しい。でも、あいつらは世界に喧嘩を売ったようなものだからな。いずれかは捕まるだろ。

6 名無し

<<5

捕まるかよwww どんだけ警察やFBIの方々がんばっていると思っっているんだwww

7 名無し

確かにそうですね。そう簡単に捕まらないのがテロリストですからね。でも、数十年前のテロリストよりはるかにマシですが。

8 名無し

<<7

ああ、あの自滅してでも周りを巻き込むバカの集まりか？ 歴史で何度も見てきたが、アレはひどい。

9 名無し

そろそろテロリストの話から話題を遠ざけましょう。他に何かありませんか？

10 名無し

<<9

他にねえ……。そうだ、才葉女守ってヤツ知っているか？

11 名無し

<<10

19 名無し

簡単だ。外見に傷がつかないで、なおかつ死なない程度に殴っておいた。

20 名無し

<<19

悪魔か！ お前は悪魔か！？

21 名無し

<<19

本人登場だ……。よし、ところで才葉がどうしたって話だったっけ？

22 名無し

<<21

そついえばそうだったな。アイツ、何であれほどまでに才能に満ち溢れているのにも関わらず、デンサン高校に通っているのだろうな。伊集院炎山のようにアメロッパの大学には軽々といけるだろうし。

23 名無し

<<22

確か聞いたことがあります、彼は友達がそつちに行つたからといつています。

24 名無し

<<23

オイオイ。結局は友達優先かよ。才能の無駄遣いとはこのことだな。

25 名無し

<<24

そう言うなって。たった一人の、大事な親友だと言っているし。大
学では学べない、大切なことを学んだんだろ。

26 名無し

<<25

おぬし、心が綺麗でござるな。みなおしたでござる。

27 名無し

<<27

いやwww いまどき忍者喋りかよwww 時代遅れにもほどがく
あwse d r f t g y ふじこI p . @ : : 「」

28 名無し

<<27

!?

29 名無し

<<27

何があつたし!?

30 名無し

<<27

忍者喋りをバカにするって、あの伝説の殺し屋、ダーク ミヤビを
愚弄すると知らないのか?

31 名無し

<<30

お前は死ぬ気か?

32 名無し

ダーク ミヤビってwww

33 名無し

<<30

やべっ、お前みたいなヤツがチャレンジャーというんだろっな。

34 名無し

昨日のニュース見た？ 科学省でテロリストがデータを盗んだって？

35 名無し

<<34

見た見た。とうとうテロリストの影がニッポンにまで。これは怖いな。

36 名無し

<<35

フン！ そんなもの、私のギガンティック・ブラスターで仕留めてやるわー！

37 名無し

<<36

厨二病乙www

38 名無し

でも、この事件で才葉のナビがデリートされたらしいぜ。

39 名無し

それは笑えない……。

40 名無し

<<38

ご愁傷様。としかいえないな。それにしても、大丈夫か才葉の野郎。アイツ、自分の持ちナビをまるで弟のようにかわいがったりしていたらしいからな。いつもは貶してばかりだが、それでもアイツは、心の支えが持ちナビだ。自殺とかしなければいいが……。

秋原スクエアの掲示板（後書き）

秋原町は、今日も平和です。

第2章「デート・オブ・ベースボール」上

ピンポン

真夜中に、才葉家にてインターホンの音が響いた。

たまたま起きていた祈架は、真夜中に誰よ。と呟きながら玄関に出る。

ガチャツ。

誰かを確認するなり、態度を一転させる。

「…………今更何の用ですか？ ワイリー博士」

車椅子に座った老人、ワイリーである。

「そう固いことを言うでない祈架よ。元ワシの研究員として働いていた時のよしみとしてもらえぬかのう」

「そうねえ。でも、今更WWWに戻る気もまっさらなことだしね」

「誰もWWWを再結成するとは一言もいってはおらんが」

呆れかえるワイリー。

一方祈架は、そんなワイリーの姿を見て楽しそうにしていた。

「それで？ こんな真夜中に何の用なの？ こちらとしては肌が荒れるからさつさと眠りにつきたい気分よ」

「そうか、それはスマンかった。実はな、ちょっとしたお礼とプレゼントを用意したのじゃ」

「プレゼント？ 誰に」

祈架が首を傾げる。

「女守にじゃ。あやつは自分のナビを失って、悲しんでおろう」

ピクリと、祈架の目が動く。

「ええ、悲しんでいるわよ。それも、誰も悲しむ姿を見せたくないって部屋に閉じこもるほどに」

「それは重症じゃのう。早期に立ち直らなくては、お前さんも困るじゃろう」

「ええ。それなりに……………ね」

意味ありげそうに言うと、「ところで」と、ワイリーの隣にいるそれを、指差す。

「その子はなんなの？ こんな真夜中に起きていては、お肌にもよろしくないわよ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

答えない。

ただ、ボーっとしているようにも思える。

「・・・・・・・・まさかとは思うけど、それがプレゼントなわけ？」

「察しがいいのう。その通りじゃ。こやつは・・・・・・・・」

ワイリーが一通りのことを、軽く説明する。

「・・・・・・・・なるほどね。それにしても、なかなか面白い物をくれるじゃない。おかげで、ちょっと面白いいたずらを考えちゃったわ」ニヤリと、怪しく微笑む。

半眼でワイリーは祈架のその姿を見ると、なにやら呆れていた。

「・・・・・・・・これこれ、これでも一応こやつは女の子じゃ。下手にいじっては、心が壊れるぞ」

「大丈夫よ。むしろ壊すのは女守の心なんだし」

「・・・・・・・・？」

「さーて、明日の朝が楽しみねえ」

ウキウキした様子で、かつ悪戯を思い浮かべた子供のような笑顔を見せる祈架。

なにやら、よからぬ計画を企てている気がするのう。

どこかワイリーは、怯えていた。

0110101010101010101010

朝の日差しが、嫌でも俺を照らす。

ベッドの上で、屈むようにその光をさえぎると、とつとつ苛立ってシャツとカーテンを閉める。

「……ポンド」

つい声が、漏れる。

いつもならここで「朝ですよ、才葉さま」とポンドが言い「あと5分」と俺が言うのが日課だった。

もしかしたら、と思いパソコンの方を見る。

しかし、何も起きない。

昨日の朝も、こんな感じた。

バックアップ？ そんなもの、取っていない。それには理由がある。自分に、甘えが出てくるからだ。

過去に1度、クラスメイトにとんでもない虐めを受けてから、自分の中でバックアップの概念を消した。一体何が起きたのか？ そんなこと、口が裂けてもいえるものではない。

そして、もう1つの願いがあった。

これで、2度と離れ離れにならない、最高のパートナーであったほしかった。

そういう願いも込めて、バックアップは取らなかつたのである。

だからこそ、1度デリートされたらそれっきり、戻らない。

分かつてはいた。だが、

「もし、バックアップなんてあつたら、ポンドを大切に思わなかつただろう」

口ではああだが、実際にポンドは大切にしていた。

俺を知る、唯一の友なのだから。

しかし、そんなポンドももういない。

あの時、闇雲に暴走してしまったから、こうなったのだ。

「……父さん。俺は何かを失う定めなのでしょうか？ だとすれば、俺はこの世界ごと、自分を破壊したい」

ギュッと、毛布を握り締める。

それだけで、涙が出てきそうな衝動に襲われる。ギリッと齒軋りを

し、今までの自分を悔しがる。

俺は、堕ちているのか。

俺は、俺は！

「……考えるだけ無駄か」

そう分かり、とりあえず落ち着く。

このまま世界の破壊者になるのも当然かまわない。しかし、それだと生んでくれた母に大変失礼だ。

このまま生き恥を晒すほうがよっぽど楽だ。

「……それはいいとして。何で俺、裸なんフェクシユ！」

あ”ー、昨日は少し冷え込んでいたからな。風邪でもひいたか？

しかし、それはどうでもいい。問題が、どうして俺は今生まれたままの姿なのかを誰かに聞きたい。

昨日もこんな感じ、いや、今よりも酷かったっけな。しかし、少なくとも服を脱ぐようなアホな真似はしていないハズ。だとすれば、任意的に誰かが脱がしたとしか考えられない。

そうなつてくると、誰がやったのか？ すぐに見当がつくから困り者だ。

「……一体何を考えているんだ、母は？ いや、この場合は企んでいると言った方が正しいな。息子の服を脱がす、悪趣味はないと思うから。」

なにやら恐ろしいことが起きそうな気がしてならない。

「この状況で、何を企んでいる？」

ふと見れば、あちらこちらに服が散乱しているし……。

「俺は酔って狼となった成人男性か」

一応ツツコミを入れ、散乱した服を着るためにベッドから身を乗り出そうとする。

フニッ

……さっき、ベッドの中でではならない感触がしたん

だが？

柔らかい何かが、足に当たっている感触がする。

「……考えるのはよそう。今は目の前にある真実を確かめるのが先だ！」

ガバツ！ 毛布をひっぺがえす。

「こ、これは！」

俺は大きく目を開ける。

そこには、白く輝く、コピーロイドが！！

「意味わかんねえよ！」

うっかり、いつもの冷静さを失ってツツコむ。

いや、いくらなんでもおかしいだろ！？ 何でコピーロイドがここにあんだよ！ どんなに思考を捻っても、考えが全く読めねーよ！

「……それにしても」

そつと、コピーロイドの頬を触ってみる。

フニフニ。

うん、人間の皮膚みたいだ。触り心地は抜群だ。

「……で、これをどうしろと？」

やはり思考が付いて行けない。

ふと、頭の方を見る。試にと、頭を撫でてみる。

まるでお坊さんを撫でるような、清々しい気分だ。

「……」

くだらないな。そう自分で自覚し、何だか申し訳ない気分になる。

「……ん？ なにやらコピーロイドの頭の部分に、付箋が付いている。目を凝らして、見てみると。」

『大人のお人形よ』

「知るかよ！だから何だよ！！」

逆上し、その付箋を取ると、思いっきり引き裂いた。

「はぁ……はぁ……朝から騒々しい」

愚痴をもらし、とりあえずコピーロイドをどうにかしようとして抱きかかえる。

丁度胸の辺りが顔に当たって、恥ずかしい。

これが男だったらとんでもない絵図となるだろう。どこか、モザイクしかかからない。

しかし、女性だったらなおさら大問題だ。社会的復帰は絶望的だろう。

しかも、まだ俺は裸だし。そろそろ服を着ないと危ないかな。

抱きかかえたコピーロイドを降ろそうとしゃがむ。

その時だった。

「ハイ、こっちを向いてー」

不似合いな口調が飛んでくる。

恐らくこの声は母の声だ。

何事！？ と俺は声が聞こえた廊下の方を振り向く。そこには、最

新式デジタルカメラを構えた母の姿がぼつちり目に入る。

パシャ！

眩いフラッシュの光が、目潰しをするように輝く。

「……………一体なんのつもりだ？」

いきなり意味不明な行動に、半眼で母を睨む。

「なにをするって、犯罪現場をカメラに収めただけよ？」

「犯罪？ 一体なんの話だ」

確かにコピーロイドを裸で抱きかかえている姿は変態としか言いようがないが、それでもまだ犯罪者のレベルには達していない。

しかし、母は顔色を変えずに、

「あらら。それだったら目の前にいる女の子は一体誰なの？」

目の前にいる女の子？

疑問を持ちながら、流れるようにしてコピーロイド……………だった！ ものに振り向く。

「……………」

ん？ コピーロイドの色って、こんな感じだったっけ？

それに、なにか様子がおかしい。

……………まさかな。これ、服だ。

それに、頭から伸びているコード。いや、髪の毛だな。そして、もつとも恐る恐る見たところが、顔だ。

「……………」
そこには、無表情で、アゲハチヨウのような髪飾りをした女の子が、ジッとこちらを見つめていた。

「……………」
俺も言葉を失う。見た目的に、小学生か中学生であろう。まだあどけない表情をしている。

しかし、そんな中でも何かしらの「美」を感じる。

コイツは将来、大物になるな。と呑気に考えている暇などなかった。一応俺は裸だ。しかも、抱きつく姿勢を未だに崩しておらず、見るからに俺は犯罪者と貶されても問題ない状況だ。

「……………」
俺はゆっくりと、その場を離れる。

「……………」
それでもなお、こちらを見つめている。

「……………」
い、痛くねえよ。そんな視線、痛くもなんとも。

「……………」
そうだ。京の町へ行こうかな。あそこなら邪念を一発で吹き飛ばしそうだし。

「……………」
いい加減に耐え切れなくなったので、俺はPETを取り出し、起動させる。

「……………」
その小さな口が、ようやく開いた。

「ちよつとな。朝起きたら少女がいて、犯罪者に仕立て上げられそうなので犯人を捕まえてくださいと言おうとしているだけだ」

「この場合、捕まるのはあなただけです」
……………。

正論すぎて、言葉を失う。

手を止め、静かにPETを直す。

ダメだ。汗と震えが止まらない。

「……さて、さっきの画像を裏インターネット経由でうつかり流出させよう」と

「やめろおおおおおおお！！！」

朝の朝から、ご近所迷惑になりそうなくらい大音量で、叫び、母を止めようと奮闘した。

社会的に殺されるよりは、遥かにマシだ。そう、自分に言い聞かせた。

第2章「デート・オブ・ベースボール」上（後書き）

ご指摘、感想などがありましたら感想にお書きください。皆様の率直な感想をお待ちしております。

第2章中の上(前書き)

なかなか長くなりそうだ。

普通にゲーム感覚で作っているからか？

第2章中の上

さて、時を進めること数時間後。

朝からの騒動からひとまず落ち着きを取り戻した俺だが、どうしても無視することのできないそれが近くにある。

地下鉄に揺られ、席に腰をかけながら音楽を聴く。

その隣では、それが当たり前のごとく少女1人が座っていた。

「……遅刻ですね。完全に」

「どうしてお前の口からそんな言葉が出るのかがまず疑問に思うのは、俺が腐っているからか？」

「……腐男子ですか？」

「違う!!」

周りから冷たい視線が俺に向けられる。

どうも心が持ちそうにない。つてか、何で朝っぱらから俺がBL疑惑を持たねければならねえんだよ。

癪にも程がある。

「……ねえ」

「何だ？ ある程度の自重気味の質問なら答えるぞ」

「……それって、さっきのが自重していないって意味になりますが？」

「腐男子ですかと言われて、それが自重していると言えるのか!?!」
やはり馬が合いそうにない。

と、車内アナウンスが耳に届く。

『デンサン高校前、デンサン高校前、降り口は右側です』

見れば、駅のホームに差し掛かっていた。

ひとまず俺は立ち上がり、ドアの前に立つ。

その後ろに、まるで子供のようにピッタリとついてくるアイリス。

無視するも電車が止まり、ドアが開くまでの沈黙があまりにもきつすぎて、ついに俺は振り返る。

「お前な、一体なにをやりたいんだ？」

「……絶対に逃すなと祈架さんから言われたので」

「本格的に何か致命傷だな、お前は!？」

自分でも日本語を間違った使い方をしたなと思うぐらいに、つつこんだ。

100011101001001101110

そして職員室。

事情をざっとヒノケン先生に伝える。

なんだか楽しそうに俺の話聞いてるようだが、嫌な予感しかないのは何でだろうな？

しかし、その予想は的中した。

「ほう。ワイリーの旦那、おもしれえモンをよこしたな。アレか？」

2人は遠い過去から運命の糸で繋がれていた的な何かか？」

「知るか。そもそもどこで遠い過去からって話になった。話の流れが無茶苦茶だぞ」

「いいじゃねーか。そんなロマンチックな話、俺は好きだぜ」

「アンタの都合で決めた!？　そしていつから運命の話になったんだよ!！」

どうにもかにも、ヒノケンはその話題から変えるつもりはないらしい。

「つか、熱血先生がロマンチストってどうだよ。」

「だが、思った以上に立ち直りが早くて助かったと言ったらウソになるが、でも良かったぜ」

ヒノケンは一ツツと悪意を込めた笑いをした。

火が好きだけに。

「でも、ポンドを失った悲しみがなくと言われたら、そうではない。なんにせ、大事なパートナーを犠牲にしてしまったからな」

悲しみは、忘れてはいけない。

どんな理由であろうとも、失ったものは失ったのだ。簡単にどうにかできるとは言い切れない。

「しかし才葉。お前は真面目なのか不真面目なのかが気になってるところだ」

「どうしてだ？ と首を傾げる。」

「いつも授業中は居眠りばかりして、マトモに話を聞く気はないし」

「そりゃ、天才だから既に知っているし、聞いてもつまらないだけだ」

「帰りのホームルームもたまたまに逃げている場合もあるし」

「そりゃ、面倒くさいから」

「そのクセに成績優秀なために、一部の先生からは嫌われているぞ」

「そりゃ、天才だから嫌われてなんぼだ」

「・・・ポジティブなのか？ それとも屈辱か？ どっちを取っても、結果は残念天才にしかならねーよ」

「おお、いいかもな。そのあだ名。」

「しかも、何で妙に気に入ってんだよ。まあ、その辺は個人の事情として受け取っておくとする。コイツに命令などしても、聞くとは思えんからな」

「ごもつともだ。」

「・・・完全にボケとツツコミが逆になってるぞ」

呆れられながら、報告が済んだらさっさと帰れとジェスチャーで感じ取った。

証拠に、シッシと手を前後ろに振っていた。

「それでは、失礼しました」

「気をつけて帰りな。それと帰り道背中に気をつけな。熱いバーナーがお前を撃つから」

「完全に犯人お前だろ！ 一体なにをやる気だ!？」

縁起でもないことをサラリと言われながらもとりあえず職淫室を後にした。

「・・・しっかし、休日に学校に来てまで報告するってどうよ。」

周りの奴ら不審な目で見ていたぜ」

何か言ったような気がしたが、気にしない。

一応報告だけだったのでアイリスは別の場所で待機しているのだが、行ってみたら

「……やっぱり、アイリス！」

熱斗が愕然とした目で、アイリスを伺っていた。

ついでにメールも、信じられないと言いたそうな顔をしている。

まあ、デリートされたと思われるていたナビだからな。仕方がないと
言えば仕方がない。

ちなみに、実体化しているのは言うまでもなくコピーロイド。

しかもワイリー製のバージョンアップされた優れたものだ。

よくぞそんなモン俺によこしたなと関心と疑いの気持ちが入り込めるばかりだ。

「……久しぶり。熱斗くん、メールちゃん」

「やっぱり女守の言った通り、あのプログラムがお前のカケラだったのか」

「……そう、貴方たちが集めたおかげで私は復活したの」

「復活って。また大胆な表現ね」

なぜか呆れているメール。

しかしながら、目が全く笑っていない。

「……どうしてだろうか？ 夏に近づきつつあるのにも関わらず
ちよつと肌寒いような。」

「……大丈夫」

何が大丈夫なんだ？

「……熱斗くんには、メールちゃんが必要だから」

あ、熱斗が盛大に吹き出した。

顔を赤くして、何かワタワタとしているようだが。

「何でだよっ！ 何でメールが必要になるんだよ！」

「……違った？」

「うっん、ぜんっぜん違ってないよ！」

しかし、

「・・・何か間違えました？」

ガシッと、服を掴まれる。

ナビだからか？ コピーロイドだからか？ 力は強い。

「放せアイリス。俺は今、大空を駆け巡りたいんだ。その翼に大きな背中を生やしてなあ！」

『才葉くん。完全に壊れているよ。それに翼に背中を生やしてどうするの？』

熱斗のPETからロックマンの声が聞こえる。

つい取り乱し、言葉を間違えた・・・。

「・・・どうしたのですか？ 急にバックを開けて」

「ああ、ただカッターで手首切ろうかなと思っただけさ」

「・・・ダメです」

バックごと、アイリスに取り上げられる。

「頼む、逝かせてくれ！ 俺の相棒の待つ、あの世へと旅立たせてくれえ！ この世に未練などない。あるのは後悔と憎悪だけだあ！」

うがあああああ！！ 俺の名に汚れが生じたああああ！！

そう言わんばかりに嘆く、俺であった。

10100010010001011110110110101

誤解をとき、どうにか汚名を着せられるのだけは避けた。

そして朝、母から言われた言葉をそのまま熱斗たちに伝えた。

『この子はアイリス。それは知っているわね』

『知っているも何も、回収したのは俺だぞ』

『あらあら、反抗期かしら？ これだから最近の子供は愚かだとスターチルドレンさんが言うのよね』

『スターチルドレンって誰だよ！？』

『まあ、そんな冗談半分は放っておいて』

『半分なんだ！？ どこが本当でどこが嘘なのかが分からないわっ！』

『……あの、才葉祈架さん？』

『祈架でいいわよ。それで女守、今日からアンタはこの子をネットナビとして使いなさい』

『話の順序を考える。何でいきなりそんなことを言われなきゃならねーんだよ。つーか、俺のナビは既にデリートされたんだ。これ以上ナビを持つ気はまるつきりない』

『大口叩くわね。いいわ、さっきの写真を裏インターネットにばらまけば社会的に死ぬのは明白だし、そうしよう』

『やめろおおおおお！！』

「……っていう訳だ」

まさか、ナビを持ってと脅迫される日が来るとは思ってもいなかった。流石の熱斗も、それには同感したようだ。

「……は、はははは」

「何にも言えない、わよ」

「分かってるよ、チクショー！」

取り乱す俺。

まさに情けなさ全快だ。

『やっぱり才葉さんのお母様は、何か凄い』

『ロールちゃん、そこは感心してはいけないけどね』

むしろ批難してくれ。

「はぁ……何で俺に降りかかるものが全て災難なのかを、知りたくなった」

「そりゃ、厄日だからじゃねーの？」

「その日だけならまだマシだが、俺の場合は年中災難ばかりなんだよ！」

それ即ち不幸って意味だ。

「まあ、元気出しなよ才葉くん。いつまでもウジウジしていたらポ

ンドに失礼でしょ」

慰めてくれるメール。

この人、本当に良い人だよな。

誰の妻になるか、楽しみだ。

「つと、そう言えば熱斗。お前は何でここにいるんだ？」

すると、なぜか暗そうな顔になる。

「課題、忘れて、学校に呼び出されて、メールに助けを頼んで、今の状態、なんだ」

.....

「熱斗。メール依存症じゃないのか？　あまり人の親切に頼りすぎない方が身のためだぜ」

「さっきロツクマンからも同じことを言われたよ！」

いや、大体考えることは同じだから。

「メール、あまり熱斗を甘やかせるな。このまま行けばダメ人間になっってしまう」

「既に手遅れだけどね」

「俺完全にダメ人間扱い！？　なあアイリス、お前はとうなんだ！　どうしてそこでアイリスに求める。」

「.....基本的なことは、バッチリだと思う。ただ、勉強が、ダメだとは言える」

「断言された！？　お前ら、もう少しお世辞を聞かせろおおおおお
お！...」

絶叫し、喚く熱斗。

そこは普段を見ていれば分かるだろ。

「しかし、それがまたお前らしいと言えばお前らしいがな」

「ん？　それは褒め言葉か」

それは言えない。

恥ずかしいから。

「さあな。ご想像にお任せする」

「ふうん.....じゃ、褒め言葉として受け取っておく」

ポジティブだな、オイ！

「お前な、少しは頭を使え……………」
言いかけた時だった。

ブルルルルルルルル

今時電話風の着信音が響く。

これは……………。

「俺のだ」

ホルダーから、取り出す。

少し弄っていると、熱斗がさっきの着信音に対してか？ 口を開く。

「女守。お前の趣味が分からなくなってきた」

「うるさい。昔風のヤツが好きなだけだ」

ピツと、オート電話モードを起動する。

音声だけのようだ。

「誰だ？」

『……………』

無言だ。いたずらか？

だが、すぐに声が聞こえた。

『……………デンサンエリア2の、スクエア入口に来い』

来いって、また脅迫がまいな。

「いやだ。とでも言えばどうする？」

『……………』

返事がない。

別にどうこうする気はないらしい。

「……………わかった。少し時間は食つかもしれないが、来ればいいだけの話だろ」

『物分りがよくて助かる』

「そりゃどうも」

軽くお辞儀をする。

『それでは、また会おう』

プツッ。

電話が切れる。

「どうしたんだ、女守？」

熱斗が訊いてくる。

別にこのことは内密に、などは言われていないので一応答えてはおく。

「いきなりダンススクエアに来いだと。どこのどいつかは知らんが」

「・・・怪しいですね、それ」

「確かに、先日事件に巻き込まれたばかりだが、別に危害を加えようという気はないと思うから安心しろ」

「・・・どうして、そう思うのですか？」

疑問を抱きながらアイリスが聞く。

別にこれと言った根拠もないので、軽く

「感だよ、感」

「感で物事を判断するのかよ」

熱斗がツッコむ。

別に気に止めはせず、その場で熱斗たちとは別れた。

第2章中の上(後書き)

中の下、そして下になります(予定では)

キャラ紹介

さいはめもり

才葉女守

15歳

本作の主人公。普段は冷静だが、一度取り乱すと崩壊する。過去に起きた事件に関わっていた人物であり、一応危険視はされているものの、本人はごたごたを起こす気はまっさらでない。

それと、小さくて可愛いもの好きで子猫などを見ればすぐに飛びつく。実際、こっそりと近所にいる猫を愛でたり餌を与えたりする姿が確認されている。

余談だが、ロリコンではないものの若干シヨタコン気味な一面も持っている。そのため、たまーに変態と化す場合も少なくないらしい。持ちナビであるポンドを失い、落ち込んでいた時にワイリーからアイリスを授かり、それ以降様々な事件に関わっていくこととなる。髪型は金髪でかなり長め。それはまるで、ゼロウィルスである「ゼロ」を連想させる。だが、広がらずにしなやかに纏まっている。

第2章中の下

ナビとは言っても、様々な種類がある。

例えば「ノーマルナビ」。シンプルでかつ値段も安い、一般的なナビである。

そしてそれを改造したのが、通称「ヒールナビ」と呼ばれる種類だ。こちらはノーマルナビよりも戦闘力が高く、それが故に暴走族や裏の組織に用いられるタイプだ。

しかしながら、それだけではない。

最近は自分好みにチューンしたり、元から特殊なナビにする人も増え続けているとも言われる。

もちろん、自分で改造することも可能だ。だが、それには専門的な知識や技術を用いられる。

だからこそ、大概組織のナビは大体専門的な人がいるのだろう。様々なナビが存在する。

数日前に襲ったミサイルマンがそのいい例だ。

見た目からして重装備で、一発一発の攻撃が高いと思われる。

あんなナビに正面から立ち向かえば、例え最強と呼ばれるネットバトラーであっても敵うとは言い切れない。

とんでも改造されているのだろうな。そう思われる。

余談ではあるが、プログラムくん似のナビも存在する。

あの愛くるしさで、女性からも支持があるのだとか。否定はしないが。実際見ていて拉致衝ど・・・ほんわかするし。

どうして今、そんな話をしているのか。簡単だ。

たくさんナビがすぎるために、誰かもわからない人からの呼び出しに困り果てているのである。

01000010111010101010101010

デンサンエリア。

秋原エリア経由で行ける、ニッポン最大のネット街である。

ここでは普段お目にかかれないようなプログラムやバトルチップなどが売られている。ただし、表向きでの限界までだが。

当然、たくさんのナビも集まってくるわけであり、賑わいを見せていた。

それがデンサンスクエアで、それまでの道がデンサンエリアになる。しかし、遠くからやってくるナビも少なくない。なので、結構なナビの数がわらわらと集まっている。

「……この中から探すの、難しくない？」

「だろうな。んな中で探せと言われても、見知らぬアイツを探せ状態だからな。見つけ出そうにもまず顔が分からない今、不可能に近いだろ」

ため息混じりに、肩をすくめる。

結構な人数のナビがスクエアへと移動している。その中に、いるはずなのだが……。

『いる気配すら無いな』

「……諦める？」

『バカを言え。そう簡単に諦めてたまるかよ』

男なら、最後まで諦めるなどよく母から言われている。諦めたら、怖い目を見てきたから信じるしかないのだ。

「……流石、女守くんは強いね」

『心的にか？』

「いや、全体的に」

『そりゃどうも』

「ただし、ヘタレだけど」

『それは言わないで結構だ』

コイツ、母に似てきた気がする。

普通にしゃべるだけで、罵倒が飛んでくるかフツ。

「……あつ」

何かを発見したらしく、デンサンエリア2。の、裏道を覗く。もちろん、裏通りも存在する。知る人ぞ知る人通りの少ないルートだ。

だが、同時に危険性もある。その理由として挙げられるのは、悪ナビの溜まり場でもあるからだ。

人通りが少なければ、当然そこに集まる集団もいる訳であり……。

「オイオイ、こんな所にどうしたんだい、オジヨーチャン？」

「え？ 優しいお兄ちゃんが良いことをしてやろうか？」

当然、そんな奴らが絡んでくるのである。

いや、その前にズゴズゴと何の躊躇いもなく入ったアイリスはある意味凄いのだが。

それにしても、相手は2体か。

1人に対して2人で絡んでくるとは。

「……？」

「あ？ しゃべれないのか？ それともプログラムの不調子かあ？」

「すみません。宗教への勧誘はちよつと遠慮させてもらいます」

「誰が宗教の勧誘をした!？」

相手のナビは絶叫した。

そりゃ、挑発したのにいきなり勧誘したと思われればそりゃ誰でも動揺するわな。

『アイリス、お前は一体何を勘違いしているんだ。このナビたちはな、寂しい人だから構って欲しかったただけだと思うぞ?』

「お前も勘違いしすぎだろ!？ 何、俺たちは寂しい人グループなのか!」

「……そうなの？ 女守くん」

『多分そうだと思う』

「んな訳あるか!」

おお、最近の若者はキレやすいとは言われていたが、まさかここま

で短気だとは思わなかった。

「コケにしたいのか？ それともバカにしているのか。どちらにせよ、黙って帰す訳にはいかねえようだな」

「……だつたらどうするつもり？」

「ヤリ。と相手ナビの表情が変わる。」

「アレだな、アレ」

「決まってるんだろ。コケにした罰だ。ここで死ねえい……」

その手をソード系のチップに変換させた時だった。

相手悪ナビの首筋に、刃の先が突きつけられる。

「動くな」

声が聞こえる。

悪ナビの表情から笑いが消え、ただ怯えているように動かなくなつた。

「ワタシの妹に手出しをするとは、いい度胸をしているな」

「あ……ハイ」

「サーセン。いや、マジで出来心だつたんです」

ついにはガタガタと震えだした。

そんな様子を見て、後ろのナビはため息をつく。

「今回は見逃すが、次見かけたら容赦はしない。分かったらここを去れ」

言葉に感情が見当たらない。それがまた、恐怖を感じさせた。

「ひ、ひいいいいいいい！！」

悪ナビたちは一目散に逃げていった。

ただ哀れとしか思えない姿だ。

「……兄さん」

アイリスが呟く。

兄さん？ 何の事だ。

「……久々だな、アイリス」

「兄さんこそ」

「……え？」

知り合いなのか？　と言うより……。

「兄妹！？」

似ていない。ってか、ナビに兄妹なんていたんだな。

同時期に開発されたとか、その辺りなのか？

「……その顔では、自分が何者かを正確に言っではないようだな」

「……ええ」

アイリスはコクンと頷く。

相手ナビは、やはりそうかと呟く。

「なあアイリス。そのナビは一体？」

俺は訊く。

ちよつと軍人つぼくかは知らないが、黒々とした色合いにマント。

肘より先は義手なのか？　それにさっきまで剣となっていたが、今は普通の腕だ。

不思議そうに見つめていると、相手ナビが俺を睨む。

「……それで、コイツが才葉女守か」

「いきなりコイツ呼ばわりかよ」

何だか見下されている感が半端ない。

「……戸惑いの目をしているな。まあ、無理もないが」

『どう言う意味だ』

いきなり目がどうこうしているとか言われて、どうしろと言っただ。少なくとも俺は人間として出来ていないから意味すら理解しようと思わないがな。

それと、気になっていたことがある。

『……一応聞くが、お前がこの場に呼び寄せたのか？』

察しがいいな。とばかりの薄笑いを見せる。

「正解とも言えなくはないが、正式には違う」

『どっちだよ。フェイントか？』

思いっきり回りくどく言っているようだ。

「正確には、ワタシのオペレーターであるバレル様が呼び寄せたの

だ」

バレル。どこかで聞いたことのある名前だ。

確か俺の記憶が正しければ、不死身のバレルと呼ばれた男のことじゃないのか。

確か数年前まで行方不明だったが、ふとした時にアメリッパ軍に突如戻ってきた、それによりより一層「不死身」の名を強めたあの、バレルのことか？

もしそれが本当なら、一体何の用なのか？

『そうだ。私がお前を呼んだ』

声が聞こえる。

ブオン、と顔が映し出される。

中年っぽいが、ダンディと表す方がピンと来るヒゲや切るのが面倒くさいと感じさせるようなボサボサ気味の髪、そしてコートを羽織っている姿はまさに、男の中の男をイメージさせる。

ちなみになぜコートを羽織っているかが分かるのか？ チラツと見えたからだ。

『お前が、バレル』

『そうだ。今日ここに呼び寄せたのは私だ。そしてこのナビはカーネルと言っ』

無表情のままだ。

何を考えているか検討もつかない。

『……警戒しているようだな』

『当たり前だ。突然呼ばれて、おまけにナビもあんな戦闘心剥き出しな姿をしていると、いつ襲われるかという心配が出てくる』
すると、肩を落としたのはカーネルだ。

『……言っておくが、ワタシの姿は元々からだ。それに、それを言えばアイリスを多少貶すことにもなるぞ』

何を言っているのか？ まさか

『兄妹だから、思考は同じとでも言いたいのか？』

「いや、アイリスは元々ワタシの優しさのプログラムだ。だから同

「人物と言った方が正しい」

.....

まさかな。優しさのデータとわかった時には、誰かの優しさプログラムに手を加えてナビにしたと推測ができていたが、このナビだったとは。

ちよつと驚きだ。

「お前のプログラムだったのか。だったら何で見た目がこんなにもかけ離れているんだ？ 普通なら、何かしらの印象が残ってもおかしくないハズなのだが」

疑問をぶつけるも、カーネル自身も悩み出す。

「.....それは分からない」

「分からないって。自分自身だろ。ある意味」

「確かにそうだ。だが、何が原因でアイリスが女性型ナビになったのか？ それとどうして優しさのプログラムがここまで思考を持つようになったのか。ワタシにも分からないことだらけなんだ」

ふむ。つまりアイリスは俺が思っている以上にややこしい経路を辿ったナビな訳か。

これはたま、面倒くさそうな出来事に遭遇する可能性も0ではないな。

「それで、ここに呼び出したのは兄妹の顔合わせってか？」
するとカーネルは首を横に振る。

「勘違いするな。わざわざワタシはそんなことをするガラではない。それに、ここに呼んだのはバレル様だ」

「そのオツサンが？」

オツサンと言われ、少しグッと見えない矢にでも刺されたようだがすぐに体制を立て直す。

「ああ、ちよつとな。アイリス」

「なんででしょうか？ バレル様」

素っ気ない表情のまま、答えた。

その辺りは似ていると言えば似ている。

『あの時、お前とカーネルは自爆したはずだが。どうして今もこうやってデータとして残っているかを聞きたい。カーネルに聞いても、答えようとしなからな』

いや、待て。

『本人の前でそれを言うのはどうかと思うが』

『分かっている。だからこそだ。アイリスが答えてくれれば、白状すると考えてな』

『その前に口封じすると考えられるが』

相手はナビでも、思考は持っている。

アイリス自身だって教えようとは思わないだろうし、そもそも過ぎた過去を問い詰めるのはどうかと……。

「……それは私も思っていたところ。だから教えて、兄さん」
お前自身も知らなかったのか。

「……バレル様。ここはもう、話すしかないのですか？」

『話してくれたら私も助かる。お前の心境や、これからの在り方にも関係するからだ』

とうとう白状する気になったらしく、閉ざされていた口が開いた。

「……あの時、アイリスと融合し優しさのプログラムが戻り完全なワタシとなった。までは知っているな」

『……ああ。ワイリーから話を聞いた』

「完全体となったワタシは、融合した瞬間に発動される自爆プログラムを利用してグレイガを破壊しようと考えた。だが1つ、今のワタシとしては予定外のこと起きた」

「……それって、一体？」

『完全体となった。それは同時に、己自身の優しさを取り戻したとも言えている。だからこそアイリス、お前の「少しでも熱斗くんたちと一緒にいたい」と言う感情がワタシに伝わり、それを叶えたいという一種の歪みが生じた。だから、不完全な状態で融合を解除し、ワタシだけ自爆することを決意した。だがその結果、グレイガを破壊できず、バグのカケラとなってどこかへ吹き飛ばされた。おまけ

に、ワタシたちも今ではこんな状態だ』

こんな状態。恐らく、自爆によってほぼデリートされた状態のままネットをさまよっていたのだ。ただで済む話ではない。

「・・・プログラムの欠落ね」

「その通りだ。だがワタシはそこまで被害がある訳ではない。だとすれば、一番被害があったのはアイリス。お前だと判断した」ムツとした表情になるアイリス。

どこか思い当たるフシがあるのだろうか？

「・・・当たり前。今の私には、本来の姿であるオペレーションプログラムが一部を除いて破壊されてしまっている」

やはりな。そうカーネルはぼやく。

「すまない、そうなったのはワタシの責任だ」

深々と頭を下げている。

そこまで責任感を感じているのだと思わせられる光景だ。

アイリスは、髪をなびかせながら首を振る。

「いいのよ。私だって、覚悟があったけどそう思わせる原因を作った張本人になるから」

「・・・だが、このままではワタシの気が済まない。だから、これを受け取ってくれ」

カーネルはプログラムを取り出すと、アイリスに渡した。

「・・・これは？」

「今日行われる野球のチケットだ。デンサン野球スタジアムで行われるそうだが、生憎ワタシもバレル様も野球には興味がなく、おまけにこれから仕事がある。だが折角友人から貰ったチケットだ。無駄にはできない」

『つまりは、ゴミ押し付けていると思ってもいいんだな？』

『言い方を考えれば、そうなるかも知れないが。それでもこのチケット、ネットでは結構な値がついている。見る価値はありそうだとは思うが』

見る価値うんぬんはともかく、コイツとの親好を深めるのにはうっ

てつけだと言える。

『それもそうだな。人の新設をないがしろにはできない性格だから、ありがたくもらっておこう』

そう言つて、お互いに見つめ合いアイコンタクトを交わす。

目に何を感じたかと言えば、これから先、手助けできる部分は手助けしてやるとも言っているようだった。

余計なお世話だっつーの。

まっ、ようだったから。実際にどんなことを言っているのかなんてものは知らないけどな。

「・・・それでは、またいつか会おう」

「それでは。兄さん」

ピシユン。ワーブ音が鳴ると、カーネルは瞬時に消えた。

「・・・それじゃ、今から見に行こう」

『そうだな。時間がないよりはあつたほうがマシだとも言えるからな』

続けて、アイリスもプラグアウトした。

0 1 1 1 1 0 0 0 1 1 0 1 0 1 1 1 1 0 0 0 1 0 1 0 1 0 0 1 0 1 0 1

一旦家に帰り、支度を済ませると母に事情を伝えて出かけることにした。

「そんな訳で母さん。今から出かけるから」

「あらあら、こんな初めからデートなんて。若々しいわねえ」

若作りしているアンタにだけは言われたくない言葉だ。

「今さつき、失礼なことを思わなかったかしら？」

ミシツ。俺の頭蓋骨から明らかに鳴ってはいけない音が立ったような気がする。

あの一瞬で俺の頭を手の力だけで圧縮しようとして頑張っているらっしやる。いや、そんな落ち着いたような説明をしているヒマなんてな・・・

「痛でででででで！！ 思いませんでした！」

「そう。ならいいけど」

パツと、手の力を弱める。

その隙に母から数メートル距離を取る。

あ、危なかった。本気で殺される勢いだったぞ、アレ。

「……あの、お母様？」

「気にしないで。いつものことだから」

「いつもアンタが原因だけだな」

掴まれていた場所を抑えながら俺は言う。

まだ物理的にズキズキと痛む。

「あら、反抗期？ これだからゆとりの子供は。手がつけられないのよ」

「力の手段で全てをねじ伏せているアンタは俺が手をつけられないわ！」

どうしても母の言葉には、何か大事なものが欠けている気がする。いや、親として既に何か欠けているが。

「……そろそろ、地下鉄の時間」

「そうだった。それじゃ、行ってきます」

アイリスの手を無意識に握り、出ていこうとする。

「……っ!?!」

手を放そうとするアイリス。

しかし、なぜか途中でやめてしまう。

「……デリカシーの欠片もない」

「何か言ったか？」

ただ急いでいたから握っただけだ。とは、言えない雰囲気になった。なぜか顔を赤くしている。

「まあいいや。行こうぜ、早く」

「……徐々に、ドキツとした」

胸を抑えながら歩き出すアイリス。

母はほのぼのしそうにそれを見ていた。

「あらあら。これは子供の顔が早く見れるかもね」
俺が女性にモテているとでも勘違いしているようだ。
原因などを考えたが、どうも本能がそれを拒絶するので考えるのを
やめにした。

第2章中の下(後書き)

誤字、脱字などがあつたらしく指摘ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2397x/>

バトルネットワークアイリスエグゼ

2012年1月9日21時54分発行